国立大学法人化と「中期目標・中期計画」

法人化準備委員会目標評価部会副部会長　藤井　大司郎

今、山口大学内のどこにいても「中期目標・中期計画」という言葉を聞かない日はありません。それも、ただ口の端にのぼっているのではなく、大学内のあらゆる組織でこの「中期目標・中期計画」作りのために多くの教職員が知恵をしぼり、議論し合っています。

これほど多くの大学の教職員が共通の作業に多くの時間とエネルギーを割いて共同して取り組むということは初めての経験だと言ってよいでしょう。実は今、日本中の国立大学で同じことが起こっています。

大学が評価される

平成16年4月に予定されている国立大学の法人化（「国立大学法人」（仮称）への移行）によって、組織、業務や、現在国家公務員である教職員の身分などが大きく変わると共に、国立大学には新たな目標・評価の仕組みが導入されることとなる予定です。大学の活動評価ということでは、すでに現在でも国立大学ではその教育・研究の業務についての評価を受けることが義務付けられており、大学が自ら進んで行う自己点検評価や学外者による評価のほか、国の専門的な評価機関である「大学評価・学位授与機構」による評価が行われ、その結果が公表されています。

国立大学が国民の税金でまかなわれており、国民に対して説明責任を果たしていくことが求められているというだけでなく、大学自らが教育・研究活動を改善し向上させていくために、これらの事後的評価が役立つものでなければなりません。

国立大学に自主的運営

法人化後の国立大学では、これまでのように国からの全般的な関与を受けることはなくなるとは言いながら、国が設置する組織である「国立大学」としての使命を果たしていく立場であることには変わりありません。法人化後も、税金の中から毎年度「運営費交付金」という予算の配分を国から受けることとなります。

大きく変わってくるのは、運営費交付金が教職員給与の支払も含んだ使途の自由なお金であり、各大学が如何にそれを上手に使って大学の経営を自らの手で進め、社会の評価に値する個性ある教育・研究を行っていくかを試されることになるということです。「中期目標・中期計画」は、各大学がそのプランをあらかじめ自主的に作り、国民や国に対して説明しておきなさい、というものです。

6年間の目標と計画

具体的には、6年間を一期とする「中期目標期間」（第1期は2004～2009年度）について、各大学がこの期間中に達成を目指す「中期目標」（法令上は文部科学大臣が設定）とそれを実施するための「中期計画」（文部科学大臣が認可）とを自主的な判断で作成します。これらの「中期目標・中期計画」には、教育・研究ばかりでなく、法人化後大学自身の判断に大きく任せられることになる業務運営や財務の改善、社会への説明責任など、独立の法人としての活動全般にわたる目標・計画を立案することが求められています。

そして、法人化後の新しい目標・評価の仕組みでは、新たな「国立大学評価委員会」（仮称）が大学評価・学位授与機構の協力

する山口大学

を得ながら、大学が掲げた「中期目標」がどの程度達成されたかを「中期計画」の実績に照らして評価することになっています。しかも、この評価の善し悪しが、その次の6年間に配分される運営費交付金に反映されることになるというのです。

進む原案づくり

平成14年6月に発足した「法人化準備委員会」は、「目標評価部会」を作業部隊として中期目標・中期計画の策定を鋭意進めているところです。10月には「第1次原案」を取りまとめ、現在、これをベースにして1月下旬をめどに「第2次原案」の作成に取り組んでいます。

この間、最初に触れたように、学内の全部局を対象にかつてない大掛かりな調査や中間報告に対する意見聴取等を何度も繰り返しながら、学部、研究科等が取り組もうとしている目標・計画を精査する作業をこなしてきました。また、大学の“御意見番”たる運営諮問会議開催の機会をとらえ、数次にわたり貴重なご意見、ご指導を頂いているところです。

審議する目標評価部会

これと並行して、中期目標・中期計画の前提として本学の進むべき基本方向を指し示す「長期目標」（10～15年間を目安）の作成も進められています。これには、「発見し・はぐくみ・かたちにする知の広場」という山口大学の理念を念頭に、加藤学長自らがその検討作業の陣頭指揮をとっています。

「法人化」が山口大学にやってくる

法人化準備委員会制度設計部会部会長（副学長）　平野　充好

平成16年4月には、全国の国立大学は一斉に国の機関から独立の法人に移行されることが予定されています。その準備のために、昨年６月、山口大学では法人化準備委員会が組織され、大学一丸となって精力的に準備作業をしています。法人化後の山口大学の進むべき方向をどうするかについては、目標・計画に関する事項を検討するもう一つの部会「目標評価部会」で知恵を絞っています。私たちの部会「制度設計部会」では、法人化後どういう体制でその目標・計画を実現するかという制度づくりが課題です。

大学運営は自由に、しかし、責任は大学自身で

国立大学が法人化されるとはどういうことか。運営面においても、財政面においても、「高等教育機関として社会や国民にきちんと説明がつくのであれば自由にやっていいですよ」、その代わりすべてにおいて、場合によっては立ちゆかなくなっても「それはあなたがた法人の責任ですよ」ということです。

さて、どうするか。それにしても新法人組織としての存立の根拠になる法律がまだ示されていません。法人化移行後の大枠だけは示されています（文部科学省が設置した「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」が公表した「新しい『国立大学法人』像について」）。私たちの部会では、その大枠を踏まえながら、21世紀の大学運営組織はどうあるべきかという視点を意識して法人化後の制度作りを始めています。国の機

関から独立の法人に移行して制度設計的に大きく変わる事項は次の3点です。

一頭建て体制から三頭建て体制で

第一に、運営組織の問題ですが、現在、大学の全学的審議機関は「評議会」です。これは国立学校設置法に定めがあり、教育研究等大学運営上の重要事項について審議することになっています。いわば「一頭立て体制」だったのですが、それが法人化されますと、教学事項は「評議会（仮称）」で審議し、経営事項は「運営協議会（仮称）」で審議し、学長が最終的な意思決定をし、執行することとされています。

さらに、特定の重要事項については、学長の意思決定に先立ち「役員会（仮称）」の議決が必要です。いわば「三頭建て体制」で大学を運営するということになります。役割分担が重要です。運営組織については枠組みの中でも不確定部分が多く、法令を待たなければならないのですが、昨年11月、「国立大学法人山口大学（仮称）」の制度（中間まとめ案）を学内に公表し意見を求めていますし、さらに、詳細については、部会に組織ワーキング・グループ（WG）を設置し検討しています。

国立大学教職員が公務員でなくなる

第二は、国立大学で働くすべての者が公務員ではなくなるということです。これまで公務や教育に携わる公務員ということで身分保障の上適用されていた国家公務員法や教育公務員特例法が適用されなくなります。法人化されますと、教職員は法人との労働契約関係に入ります。

したがって、民間の企業と同様、労働組合法や労働基準法等が適用されます。今まで、教職員の地位、給与等人事に関することは、国家公務員法等で定められていたのですが、法人化されますと、教職員の給与等勤務条件等については、大学が労働者である教職員の意見を聞いて、就業規則の中で定め、労働基準監督署に届け出るということになります。つまり今までは多くのことが法令で決められていたのですが、これからは法人内部で決めるということです。これからは大学は「決める難しさ」を背負っていかなければなりません。良くも悪くも法令のせいにするわけにはいきません。その意味で人事制度の根幹をなす就業規則の中身が大変重要になって参ります。

昨年11月に、大まかな人事制度に関する考え方を第一案として全学に公表して意見を求めているところですが、この問題については、さらに部会の中にWGを作って、人事制度WGと安全衛生に関わるWGに分け作業を行っております。

予算の弾力的運用と財務内容の公表

第三は、財務会計制度です。今までは、国立大学では、受験検定料、授業料及び病院収入等は、大学の収入になるというわけではありませんでした。受け取った授業料や病院収入はすべて国庫に納入するのです。国立大学は、国の機関ですから大学の管理費用や研究費用等は国から配分され、使用しています。教職員の給料も、定員法の枠内で給与法に基づいて国から支給されています。

法人化されますと、「大学自身で財務面でも自前でやってください」、「大学としての目標・計画を立て、そのために人件費や研究費も含め必要な予算を自己収入と運営費交付金を基に策定してください」、ということです。

文部科学省は、各大学の目標・計画を評価して、運営費交付金を出しましょう、という考え方です。大学はその予算の範囲内において弾力的な運用は認められますが、財務内容については、大学を構成する各組織毎に公表・公開が前提となっています。大学としての独自の財務会計制度を作るというには大変な課題です。運営費交付金の算定ルール等まだ不明なところが多い状況の中で、部会内財務WGで鋭意検討を進めているところです。

制度設計部会のテレビ会議

なお、大学には医学部附属病院があります。附属病院は、大学の中でも主として教育研究を行う各部局等とは異なり、診療業務も行い財務面でも大変重要な組織です。大学全体と共通する部分は部会及び各WGで検討していますが、附属病院独自の課題も多くあります。

この附属病院固有の課題については、附属病院には独自の法人化準備委員会が組織されていますので、その委員会と本制度設計部会や各WGと連携して検討を進めています。

産学公連携・創業支援機構について

地域共同研究開発センター長　三木　俊克

本学では、平成14年4月に学長を機構長とする「産学公連携・創業支援機構」を立ち上げました。このところ、「産学官連携」が新聞紙面を飾らない日がないほどですが、本学では廣中平祐前学長の提唱により、「産学官」でなく「産学公」といいます。「公」は英語でいうと“Public Sector”であり、企業などの“Private Sector”に対して“Public Service”を提供するものとして考えます。「学」は、教育・研究をコア業務として社会貢献も展開する機関と位置づけます。

本学の産学連携活動は、全国国立大学の中でも十指に入るものとして広く認知され、山口大学の特徴の一端を担うものとなっています。本稿では、今年度に発足した「産学公連携・創業支援機構」の役割、目標、課題などを箇条書きで紹介します。こうした機構の活動は、本学の教員、職員、学生の広範な支援がなければ実を結びません。この紙面を借りて、皆さんのご支援をお願いしたいと思います。

なお、機構のホームページ（図1）は、http://www.sangaku.yamaguchi-u.ac.jp/でアクセスできます。機構傘下の各組織が公開している各種情報の検索機能もつけています。何かの機会にご活用いただければ有難いと思います。

機構の基本的性格と役割

(1)山口大学の産学公連携及び創業支援の抜本的強化をするために、学長直轄の組織として「産学公連携・創業支援機構」を設置する。
(2)学内外とのボーダーレスな相互作用を通じて、“地域産業の活性化”と“大学自身の活性化・飛躍”とを目指す。
(3)学長の指揮のもとに、山口大学としての産学公連携・創業支援に係る中期目標を策定するとともにその実施に責任を持つ。
(4)本機構の傘下組織［①地域共同研究開発センター、②ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー、③TLO専門委員会、④ビジネスインキュベーション施設（平成14年度設置予定）］は日常的に強い連携体制をとり、機能的かつ効率的に施策を展開する。
(5)学内外の関係機関との幅広い連携を強力に推進する。

機構とその傘下組織が重視する原則

(1)外に打って出る、外から引き入れる
(例)地域と世界へ発信、リソース（ヒト・モノ・カネ）のボーダーレス化
(2)顧客満足度（学内外とも）
(例)ワンストップサービス、ベンチャー教育・技術経営教育の充実、信頼とスピード、など
(3)アカウンタビリティ
(例)目に見える結果、効果／費用比、など
(4)複層的なアライアンス
(例)地域から国際まで、異分野・境界分野、自力と環力、など
(5)法人化された大学への寄与
(例)教育に対するリターン、外部資金導入、教育・研究の活性化、など

機構が統括するサービス

◆ニーズに基づく相談サービス
◆R&Dの支援
◆人材育成
◆大学発ベンチャーの支援など

三年間の目標
（平成14年度～16年度の累計目標値）

◆民間等との共同研究・受託研究　600件
◆知的財産権の取得（特許、ソフト著作権など）300件
◆知的財産権の技術移転　600件
◆ロイヤリティ収入　2,000万円
◆大学発ベンチャー　30件

目標を達成する方法

●“知ってもらう”（広報活動の重視）顧客満足度の視点で
●“はぐくむ”（各種支援体制の強化）きめ細かなサービス
●“形にする”（誰もが分かるアウトプット）価値の創出
●“協働と協創”（自力と環力で）知の創造
●“選択と集中”（リソースの有効活用）

当面の重要課題

●機構傘下の部署における課題整理、相互補完のあり方（直ちに実施）
●学部等の部局との協力・連携（直ちに強化）
●産学公協働をスムースにする規定・契約ルール等の整備（早急に検討）
●コーディネータ及び支援員の活動強化（直ちに実施）
●ベンチャー教育・MOT教育（継続的に強化）

図1　支援機構の組織

BACK NEXT 目次へ

大学教育センター
教育改革の中心的役割を果たす

大学教育センター教育評価部　何　暁毅

大学教育センターが設置してはやや9ヵ月、センター長以下スタッフ全員手探りながら、山口大学の教育理念・目標を実現するために、共通教育や学部専門教育を含む全学の教育問題を、多岐にわたり検討・実施してきました。

ＦＤ研修の見直し及び実施の推進

FDは、大学設置基準に明記された大学教員の義務であると同時に、山口大学では教育研究委員会で全員が受講することを義務づけられたものです。大学教育センターは実施母体として、5年以内に教官全員研修できるように、今年から年二回実施することにしました。

実施にいたって、去年から行われてきたワークショップ方式の研修を受け継ぎ、内容を大幅に見直しました。「強制連結法」による授業設計及び二十分のミニ講義を中心に、8月と9月の二回にわたり、加藤学長を始め、全副学長及び各学部の教官並びに県内の他大学参加者合わせて152名が熱心に研修しました。終了時のアンケート結果によると、二回とも70％以上の参加者は良かったと評価してくれました。

言語センター設置に向けての検討

「発見し・はぐくみ・かたちにする」という本学の理念を実現するため、また、近年の学生のニーズ並びに社会の変化に対応するため、これからの語学教育はコミュニケーション能力向上を目指した実用的なレベルにする必要がありますが、現有の共通教育語学教育実施体制は到底対応できません。

そこで二年くらい前から学内有志による「語学センターフォーラム」の流れを汲んだ「語学センター（「言語センター」に改め）WG」（語学部会と各語学及び学部の代表による構成）を立ち上げ、大学教育センター内に言語センターを新設することを目標に15回にわたって検討してきました。現在、答申案がほぼできあがり、来年度発足に向けて調整・準備しています。

共通教育におけるインセンティブを導入するための検討

旧教養部解体により共通教育の負担問題は教官一人年間一コマ以上と規定したにもかかわらず、一部の部会や一部の教官に過剰負担を強いられている半面、全く担当しない教官もかなり存在しています。

このような不公平を是正するためと、学生によりよい授業を提供するため、共通教育にインセンティブ制度を導入することを検討しています。「インセンティブ検討WG」は慎重に検討を重ね、答申案を教育研究委員会に上程するべく、準備を進めています。

コースカリキュラム実施に伴う問題の改善

本年度より全国に先駆けて共通教育に「コースカリキュラム」という斬新なカリキュラムを導入しました。全く新しい試みである故に、さまざまな予期せぬトラブルがありました。

学生への説明不足、表記の不統一、用語の混乱、○付けの不当、

大学教育センター

コース設定の問題、卒業要件設定のトラブルなど、これらを一括して教務電算化システム開発という大きなプロジェクトと同時に検討を重ね、解決することを図っています。

学生評価項目の見直し及びプレ評価の導入

学生授業評価についてのさまざまな意見を吸収し、いままでの学生評価の諸データの蓄積に基づく分析を経て、学生授業評価の項目を徹底的に洗い直しました。具体的には項目を減らしてよりスリム化し、学生の記入負担を軽減しました。

項目減らしによる授業評価及び改善ポイントの不明瞭をなくすため、変わりにプレ評価を新たに導入することを進めました。授業担当者はいつでも好きなときにより具体的な項目で学生授業評価を実施できるとともに、自動処理したデータに基づいての授業改善が、自己努力でできるようになりました。

理系入門授業プレテスト導入を推進

コースカリキュラムの導入に伴い、共通教育の理系授業は多様な学生に対処するための「入門科目」を新設しました。しかし履修に関して様々なトラブルがありました。とくに履修するかどうかの判定基準は高校の「内申書」（調査書）に基づいて実施しましたが、その「内申書」の信頼性は低いものであることが分かりました。新入生によりきめ細かい履修指導を行うため、履修基準の見直しが必要であることが明らかとなり、プレテストの導入を「数学部会」・「物理学部会」・「化学部会」・「生物部会」と協議の上、実施することにしました。実施にあたり、実施時期や場所、出題・採点など細部の詰めをいま行っています。

WEBシラバスの検討

今年度からの共通教育におけるコースカリキュラムの実施及び平成16年から教務・学務事務集中化が行われる予定であることを想定すると、授業科目のシラバスをデジタル化し、WEBによるシラバス入力及び検索など教務の基礎データーとして全学的に活用するシステムを早急に立ち上げ、省力化を図る必要が求められます。大学教育センターは教務専門委員会により「WEBシラバス検討WG」を設置し、各学部との調整、仕様、実施時期などについて検討しました。基本的に来年度のシラバスから実施する方向です。

本学の山積する教育問題は一気に解決することは到底できませんが、大学教育センタースタッフ一同、山口大学を「発見し・はぐくみ・かたちにする」という「知の広場」に作り上げ、学生に優しい、教育熱心の大学を実現するために中心的な役割を果たすことを自覚し、鋭意努力する所存です。ご協力を切にお願いいたします。

熱心に研修するワークショップ

BACK NEXT 目次へ

留学生センター

飛躍的に増えた留学生

留学生センター長　中村　幸士郎

山口大学留学生センターが平成14年4月に設置されてから9ヵ月が経ちました。その間の主要な出来事についてお知らせします。

留学生受入数の増：200名から281名へ

本学の留学生受入数は、平成13年秋の200名から14年秋の281名へと飛躍的に増加しました。うれしい限りです。しかし、留学生10万人計画達成時（15年度になる見通し）には、国立大学留学生受入比率から本学には630名の受入が目標値になっています。本学の留学生対策の約6年間の遅れはあらゆる面に現れており、留学生数の点だけ見てもまだ半数に満たない努力不足大学であり、教職員全員の協力による目標達成が緊急課題となっています。ぜひともご協力をよろしくお願い致します。

「山口大学日本語能力テスト」の実施

「日本語能力試験」は、年1回12月に受験料1万円余で日本および世界の各地で実施されますが、本学の留学生が全員受け各自の日本語能力の伸びを知ることはできません。

当センターでは、留学の目的達成に不可欠な日本語学習の徹底と効率化を図るために、本学独自の「山口大学日本語能力テスト」の導入計画を立て、試行テストを10月に実施しました。第2回目は1月13日でした。

成績は、①能力別クラス編成と細やかな個人指導、②各種奨学金や学習奨励費の申請と選考、③大学院入試、④留学生指導教官による教育、等への参考資料として、大いに活用され成果が得られることを期待しています。1月と7月の受験者全員に「山口大学日本語能力テスト成績証明書」の発行、成績優秀者と伸び率上位者には賞状と記念品授与を計画中です。留学生本人の日頃の努力はもちろん、関係者の応援をよろしくお願い致します。

大使館推薦国費留学生と日韓共同理工系学部留学生の「予備教育」の開始

これまで広島大学に依頼してきた大使館推薦国費留学生の「大学

留学生新入生ゼミ

院入学前予備教育」（日本語初級週15コマ6ヵ月集中コース）の独自開講が義務づけられ、10月から4名を受け入れ開始しました。

日韓共同理工系学部留学生も10月から1名受け入れ、「予備教育」（同6ヵ月集中コース）を始めました。こちらは韓国で既に6ヵ月の研修を受けているため日本語中級からとなります。数学・物理・化学の専門予備教育と英語も必要となり、システム作りを急いでいます。

授業・新入生ゼミ・研修旅行・地域交流・留学生交流ボランティア・その他

留学生センター設置後、「日本語・日本事情」の授業開講数は宇部分室分を含め30コマを越えましたが、他大学と比べ教官も職員も不十分でサービス不足が深刻です。留学生の授業や生活指導外にも多くの行事や交流事業を抱え、教官も職員も文字通り残業続きです。教室や教官研究室の整備も共通教育棟の改修待ちとなっています。ぜひとも多くの難問を早期に解決し、本来の業務を順調に遂行できることを願っています。

「山口大学留学生センター・ニューズレター（平成14年秋号）」もぜひご覧下さい。

E-mail:koshiro@yamaguchi-u.ac.jp

○外国人留学生国籍別在籍者数（14.11.1）

国　　籍	学部学生	大学院生	非正規生	合　計
中国	32	105	32	169
マレイシア	13	2		15
バングラデシュ		13	3	16
インドネシア		3	3	6
韓国	3	7	10	20
台湾	1	3		4
ヴィエトナム	1	5	3	9
イラン		1	1	2
スリランカ		1		1
インド		3		3
タイ		8	3	11
アメリカ			4	4
ブラジル		2	1	3
ペルー			1	1
タンザニア		1	1	2
ジンバブエ		1		1
ミャンマー		2		2
ウズベキスタン		1		1
ロシア		1	1	2
オーストラリア			1	1
連合王国			2	2
メキシコ		1		1
フィリピン	1			1
ヴェネズエラ			1	1
トルコ			1	1
パラオ			1	1
エジプト			1	1
合　　計	51	160	70	281

大使館推せん国費留学生4人と指導教官

センター長（中央）と新任教官5名
（左から、今井、杉原、中村、赤木、渡辺、門脇の各先生）

教育学部の活動

地域に開かれた交流

教育学部広報委員会委員　福田　隆眞

教育学部は平成14年秋に、地域に開かれた活動として3つの行事を開催いたしました。一つは「大学の日」、二つ目は「教育フォーラム山口2002」、そして三つ目に「生雲小学校児童の大学訪問」です。いずれも地域社会の人々を対象にして教育学部の教職員、学生等が交流し、理解を深めようとする催しです。

大学の日

この催しは昨年からはじめられたもので、地域住民の方々に教育学部を理解していただくために、一日教育学部を開放し、授業参観、何でも相談、施設見学等を実施しています。

今年度は11月22日（金）に実施し、24名の参加がありました。内訳は山口市、光市、小郡町、下関市、防府市、宇部市等、さらには県外からの来訪者もありました。

参加者の意見としては、「授業は興味深いもので、学生の様子も分かり参加してよかった」「学生も楽しそうで、入学したいと思った」「授業内容の簡単な紹介があると入りやすい」「総じて良い企画だと思う」などがありました。今後もこの企画をさらに充実して実施していきたいと考えています。

教育フォーラム山口2002

この催しも昨年から始められたもので、大学内での開催は今回が初めてです。このフォーラムは11月30日（土）に開催しました。内容は、リレー講演「どうする！？山口の教育？？」、シンポジウム「協創！子どもを支える山口の教育」、「子どもの広場」の３つの部門からなっています。リレー講演とシンポジウムは、山口県教育委員会、地域の教育関係者、小学校校長・教員、大学教官をスピーカーとして、山口の教育に関わる実践的内容から制度や考え方まで幅広く講演、討論が行なわれました。

そうした中で、教育学部は今後とも地域社会との連携を深めて質の高い教育を実施していくことを確認しました。「子どもの広場」では教官と学生が地域の子どもたちと一緒になって、絵本の読み聞かせ、ものづくり、小動物との遊びなどの活動をしました。

生雲小学校児童の大学訪問

この催しは教育学部のフレンドシップ事業の一環です。生雲小学校フレンドシップ事業は本年度で3年目になります。

この事業は教育学部の学生20数名が年間通して阿東町の生雲小学校に通い、さまざまな学校体験をしています。子供たちとの触れ合い、学校行事の手伝い、地域の人たちとの活動への参加などです。その児童37名が12月5日（木）には山口大学の吉田キャンパスを訪問しました。

子供たちにとって大学の中に入るのは別世界の体験のようでした。学生と一緒に授業風景を見たり、図書館を見学したり、学生食堂でお昼ご飯を食べたりして、未来の大学生の気分を味わいました。

以上、最近の教育学部の行事の一部を紹介しました。教育学部は今後とも地域社会とのつながりを大切にして真摯に教育の問題に取り組んで行きたいと思っています。

教育学部

理学部公開総合事業
サイエンス・ミニ・カレッジ

理学部学務委員　内藤　博夫
理学部サイエンスワールド実行委員長　石黒　勝也

サイエンス・ミニ・カレッジ設立

理学部では、従来より出張講義、一日体験入学、サイエンスワールド、各種公開展示等を通じて、地域社会と交流を持ってきました。これらの経験を経て、平成14年度からは理学部地域貢献事業を総合的にプロデュースすることを目的に、文部科学省及び山口大学の支援を受けてサイエンス・ミニ・カレッジを設立しました。サイエンス・ミニ・カレッジは理学部長をカレッジ校長、理学部教官をカレッジ講師、院生をカレッジ助手とし、10名程度のカレッジ組織委員によって企画・運営されています。その事業内容は、（1）出前カレッジ、（2）サマースクール、（3）体験入学、（4）サイエンスワールド、その他科学出展等で、それぞれの事業方法など詳細が理学部ホームページで公開されています。

出前カレッジでは、毎年20件程度の依頼を受け、山口県を始め九州・中国地区の高等学校でカレッジ講師が出前講義を行っています。以下、今年度の企画の中から、そのほか注目すべきものを紹介します。

サマースクール

今年度新企画の公開講座です。7月末から9月末までの2ヵ月間、毎週土曜日午後2コマ約3時間のスケジュールで、「高校生チャレンジコース」と「社会人ブラッシュアップコース」の2コースを開校しました。基礎科学の啓蒙及び大学入学体験を目的に、数学、物理、情報、生物、化学、地学の6分野から合計16講義が行われ、講義形式も情報機器を用いたものから簡単な実験・観察を取り混ぜたものまで様々でした。また、開校式、図書館利用案内、閉校式、研究論文の募集等、大学でのバーチャル体験が満喫できるよう様々な趣向が凝らされていました。

高校生チャレンジコースに20名程度、社会人ブラッシュアップコースに25名程度の登録があり、講義全体の延べ参加人数はおよそ250名でした。どの講義でも、参加者は熱心で講師が質問攻めに合い、また毎回講義終了時に行われた質問アンケートそして翌週までの講師による回答・返却のシステムも好評だったようです。山口市近辺に限らず下関、長門等の遠方からの参加者もあり、このような催しが「いかに必要か」を思わせる企画でした。

公開講座サマースクール

体験入学

今年度は、生物科学講座主催による高校生個人参加形式の「生物科学一日体験」（8月）、文部科学省のサイエンス・パートナーシップ・プログラム（SPP）事業による交流2件（研修施設での合同合宿形式（岩国・柳井・徳山高校、8月）、高校・大学相互訪問形式（益田高校、12月）、そして理学部での授業体験（山口・柳井高校、11月）が行われました。

11月の授業体験は、「院生による研究紹介と簡単な実験デモ」と「体験授業」の2種類を数学、物理、情報、生物、化学、地学の各分野で合計12コマセットし、参加高校生が希望に従って2コマを選択するというものでした。「体験授業」の中には、高校生が一般の学生と共に講義を受けたり実験を行ったりするものもあり、互いに新鮮な感覚を覚えたようです。理科離れがいわれる中で行われた企画でしたが、参加高校生の好奇心を十分刺激したものと思います。

体験入学

本企画をきっかけに、将来の科学者が育つことを期待しています。

科学出展

今年度は、青少年のための科学の祭典「おもしろサイエンスinソラール2002」（防府市青少年科学館ソラール主催、7月～8月）に10件程度、教官および院生がブース形式で出展参加しました。親御さんに伴われた小学生を始め多くの来館者があり、期間中大変盛況であったそうです。このような地域社会の催しを通じて、科学のおもしろさや大切さを伝えることは，理学部の重要な責務の1つだと感じています。

訪問サイエンスワールド

理学部では、一般市民を対象に、毎年3月の一日を設け山口市内で科学のデモンストレーション「サイエンスワールド」を開催してきました。理学部が地域に根差すと同時に、大学で行われている科学の研究が私たちの生活に大きく関わっていることを、具体的事例を通して知ってもらいそして興味をもってもらいたいという企画です。

今年度は、地域の教育委員会や自治体、各種学会支部、マスコミの後援のもとに、山口市内の養護学校を含む全小学校を訪問し展示・演示を行う特別企画「訪問サイエンスワールド」を行いました。

具体的には，11～12月の2ヵ月の間に小学校または学区内の公民館19箇所で、小学校低学年向けから高学年・一般市民向けの内容まで数テーマの展示・実演を行うというものでした。小学校の教室での実演から自由参加の一般公開まで様々な形式で行われました。理科離れが叫ばれる中、山口の豊かな自然の中に住む子供たちの自然科学への好奇心を育むお手伝いが少しでもできたと思っています。以下は、今回行われた展示・実演テーマです。

「数に親しむ」「いろいろな輪」「多面体の世界」「算数バーチャルタウン」「夜空の向こう」「物理ふしぎたんけん」「身近なもので作れるオモチャの科学」「牛乳からチーズや絵の具を作ってみよう」「遺伝子が決める生物の形」「生物の時計」「耳を澄ませてみようー誰も知らない生き物の音の世界」「細胞をのぞいて見よう！」「生き物を観察しよう！」「微生物で遊ぼう！」「目の前で広がる結晶」「突然色が変わる不思議な水」「光る物質を作る」「液晶ペンダントを作ろう」「鳴き砂を鳴らしてみよう」「空からみた山口県」「石は磁石にくっつくか？」

おわりに

理学部では、サイエンス・ミニ・カレッジを通して、幅広い地域貢献を目指しています。これらの事業を通じて、多くの方々に科学の楽しさを知ってもらうと共に、1人でも多くの科学者の芽が育つことを期待しています。

TEL (083) 933-5656、(083) 933-5727
E-mail:naitoh@yamaguchi-u.ac.jp
ishiguro@sci.yamaguchi-u.ac.jp

訪問サイエンスワールド（小鯖小）

医学部・附属病院の活動
活性化のための対策議論

地域交流企画専門委員会委員　武藤　正彦

法人化に向け、医学部（医学科および保健学科）および医学部附属病院（以下　医学部と略します）においては日々活性化のための方策を議論する会議に追われ、春夏秋冬、味わい深い日本の四季のゆったりとした時の流れをつい忘れてしまいそうな毎日を送っています。

■医学部独自の活動

Ⅰ　講演会・実習

学部の性格上、病気やその予防としての健康管理が話の中心となります。一般市民を対象とした講座として、附属病院内で診療科が定期的に主催して行う糖尿病教室（週2回）や肝臓病教室（月1回）があります。外部主催のものに医学部が参加する形のものとして、アレルギーの日にちなんだ講演会、宇部市教育委員会が主催する大学開放講座への協力などが挙げられます。

そのほか、尿失禁の予防と対処法、HIV感染症をはじめとする健康教育、看護ケア、育児に関する講演会などが開催されています。特に、アレルギーの日にちなんだ講演会は、山口県内を巡回するかたちで開催されており、毎回200名前後の一般市民の参加があります。

私自身も何度か講演会に出かけましたが、講演のあとの質疑応答の中で市民の方々からいろいろと教えられることもあり、このような体験は私たちにとっても重要な勉強の場になっていると思っています。

以上のような講演会主体のものに加えて、実習を主体にしたものもあります。例えば、ヒトの血液の中から白い綿のようにフワフワと浮遊するDNAを抽出する手法を学ぶ実習や大学等地域開放特別事業の一環としての夏休みジュニア科学教室などです。ときには、第一線の病院で活躍されている医師の方々を対象として最新の医学知識や医療技術を修得してもらうための講義や実習指導も行われています。

医学部保健学科では、他の学部と同様、高等学校へ出向いていって講義する出前講義（出張講義）を行っています。また、いろいろな形での講義や実習指導が行われていることはお解かりいただけたことと思います。

何故、病気になるのか、どの細胞の機能異常が病気を惹き起こすのか、といった基礎研究の姿を一般の市民の方々に知ってもらうための研究室開放なども今後検討していかなければなりません。

Ⅱ　オープンキャンパスと医学部附属図書館分館

毎年8月上旬に、山口大学医学部を受験したい希望を持っている高校生を対象としてオープンキャンパスを実施しています。全国各地から毎年、医学科では70～80名、保健学科では約150名の高校生が参加しています。最新の医療技術を駆使した救急医療の現場や放射線医学、看護ケアや臨床検査の現場などを見学してもらっていますが、臨場感と感動を覚えて帰る高校生が少なくありません。

医学部附属図書館分館では、平成13年4月より学外者への館外貸出しを開始しました。利用者は医師や看護学校の生徒の方々が主で、年間100名前後の利用者数となっています。

Ⅲ　メディアの活用

山口大学にメディア基盤センターが設置され、医学部が位置する宇部市小串キャンパスには木村教授と長坂助手が常駐されることになりました。医学部広報委員会にも出席いただいて広報活動の活性化に繋げたいと考えています。山口市を中心とする地域を対象とするケーブルテレビで医学部関連の内容を逐次放送していく計画です。

病院内での活動の撮影が中心になるかと思いますが、平成14年12月には第一回としてAIDSに関する話題が放送されました。病院内で医師、看護師、臨床検査技師、薬剤師、栄養士などの職員やボランティアの方々がどんな仕事をしているのか、映像で見ることができます。

脳や胸部のCT画像の読影や緊急を要する急性心筋梗塞の治療方針の決定に関するディスカッションなど山口県内にある各医療機関と山口大学医学部附属病院とを繋ぐ遠隔医療システムの整備も次第に整ってきています。そのほか、医学部のホームページには医学科および保健学科の学生が受ける授業内容の概要が電子シラバスとして掲載されていますので、ぜひ一度アクセスしてみてください。

手段としての多様なメディアをうまく利用し、地域の方々と連携を保ちながら地域と山口大学が共に発展成長していけるよう努力していきたいと考えています。

BACK NEXT 目次へ

工学部の教育活動
技術や知恵を地域に貢献

地域交流企画専門委員会委員　山本　哲朗

現在、大学の使命の一つに地域貢献が課せられております。工学部教職員も一丸となり、地域貢献の一つとして、山口県内はもちろん他県を含めた高等学校の生徒さんを主体にした生徒さん、さらに山口県内在住の一般の方々を対象にして、われわれ教官のもっている技術や知恵を提供する場として教育活動に励んでいます。その活動状況を、本年度を例にとってご紹介しましょう。

県内高校理数科生徒の各学科研究室見学

毎年、山口県内の高校のうち、理数科の生徒さんを対象にして、工学部の各学科の研究室を見学し、簡単な実験を体験してもらいます。平成14年度は徳山高校、岩国高校および柳井高校の生徒さんが体験しました。

高校生向けインターネット特別授業開講

毎年、宇部高校理数科の生徒さんが体験学習として、インターネットの操作、ホームページの作成を体験しています。本年度から日程の許す範囲で県内高校生も体験できます。

夏休みジュニア科学教室

毎年、小学5年生～中学3年生を対象にして、大学、短大、高専の先生および企業の研究者が多彩なテーマについて分かり易い講義や見学を実施するものであります。地元紙宇部時報社の主催で、本年度は14回目の開催になりました。工学部会場では毎年2テーマを担当しています。本年度は「バナナでトンカチー液体窒素で遊んでみよう」、「発光ダイオードで未来のあかりを作ろう」について興味ある話が聞けました。

公開講座

中学生、高校生および一般市民を対象にして、工学部で毎年実施するものであり、本年度は10月26日に産業用ロボットからサービスロボットまでについての講義とロボットの組み立てを体験しました。小学生と一緒に参加されたお母さんにとってもさぞ勉強になったでしょう。

出前講義

平成13年度から工学部で本格的に始めた高校生を対象にした出前講義であり、工学部教官が県内外の高校に出向き御自身が専門にする研究テーマについて、生徒さんに分かり易く、興味のある講義をします。本年度は宮崎県立都城泉ヶ丘高校で実施された「化学は楽しいワンダーランド」を含め、60件の出前講義が行われました。昨年度は45件でした。

大学等地域開放特別事業『大学Jr.サイエンス＆ものづくり』

文部科学省主催であり、親子参加型の小・中学生を対象にしており、“ものづくり”を体験します。本年度は次の三つのテーマについて体験、勉強しました。①液体窒素の扱い方などを理解する「バナナとトンカチ」、②コンピュータの仕組みなどを知る「驚異のコンピュータに迫る～より小さく、より速く」、③電気自動車の仕掛けを学ぶ「ガソリンは使わないぞ、未来の自動車」。

宇部市大学解放講座

宇部市教育委員会が主催であり、生涯教育の一環として実施されています。本講座では山口大学の地域交流企画専門委員会の委員が各学部から講師の人選とテーマ選定に当たっています。本年度は工学部から「絵になる景観と街づくり」ほか2つの学習テーマについて担当しました。御年配の方々が積極的に参加され、勉強されておられるのが大きな特徴となっています。

本報告にあたり、山口大学工学部専門職員企画・広報担当前田崇氏の作成された資料「地域資源を活用した人材育成に関するアンケート」を参考にしたことを付記します。

TOPICS

学術シンポジウム

―山口大学の学術情報基盤を考える― の開催

■中村　和行　附属図書館長

高度情報ネットワーク社会に突入し、大学の活動を支える学術情報は、グーテンベルグ以来の大変革期の真最中にある。既に学術論文の多くは、電子ジャーナルとして全世界に流通し、これまでは極めて狭い範囲の利用に限定されていたプレプリントや各種報告書類が、インターネットで広く公開されるようになった。学術情報は、社会の共有資産となることにより、一層の研究活動を促進し再生産される。大学・学協会・学術出版社、学術情報に係る全ての組織は、この大変革に伴う様々な課題に直面しているが、この流れは誰にも止めようがない。大学においても、従来どおりの方法で学術情報を収集し、紙媒体の研究成果を関係機関に配布するといった伝統的なやり方では、生き残りようがない。今、大学には、学術情報の大変革に対応した基盤整備が緊急に求められているのである。

新しい時代の大学図書館

このような現状認識に基づいて、附属図書館は、メディア基盤センターの後援を得て10月1日（火）、大学会館大ホールにおいて、〈学術シンポジウム〉「山口大学の学術情報基盤を考える」を開催した。

開会挨拶をする加藤紘山口大学長

基調講演（伊藤義人名古屋大学附属図書館長）

TOPICS

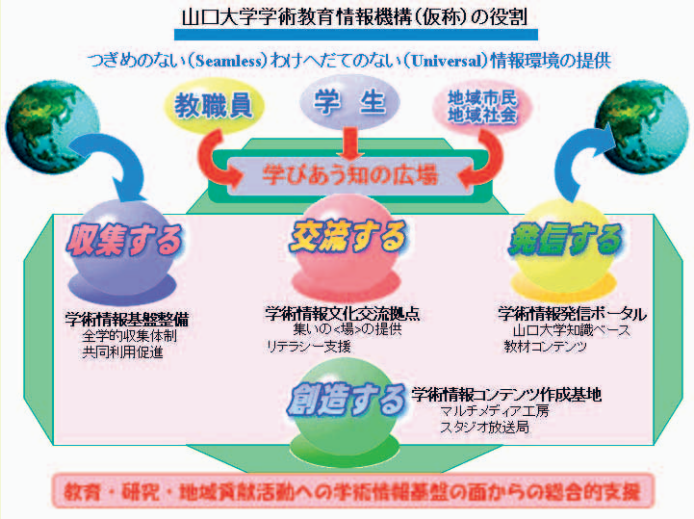
シンポジウムのテーマは「学術情報の体系的な収集体制と情報発信機能の整備」とし、国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース主査の伊藤義人名古屋大学附属図書館長をお迎えし、基調講演（「新しい時代における大学図書館の役割」）をお願いした。さらに、伊藤名大館長、森田雄介徳島大学附属図書館長、石黒勝也附属図書館運営委員（理学部教授）、立山紘毅山口大学メディア基盤センター副センター長（経済学部教授）の4名のパネリストによるパネルディスカッション（コーディネイターは、附属図書館長の私が勉めた）の２部構成とした。

パネルディスカッション

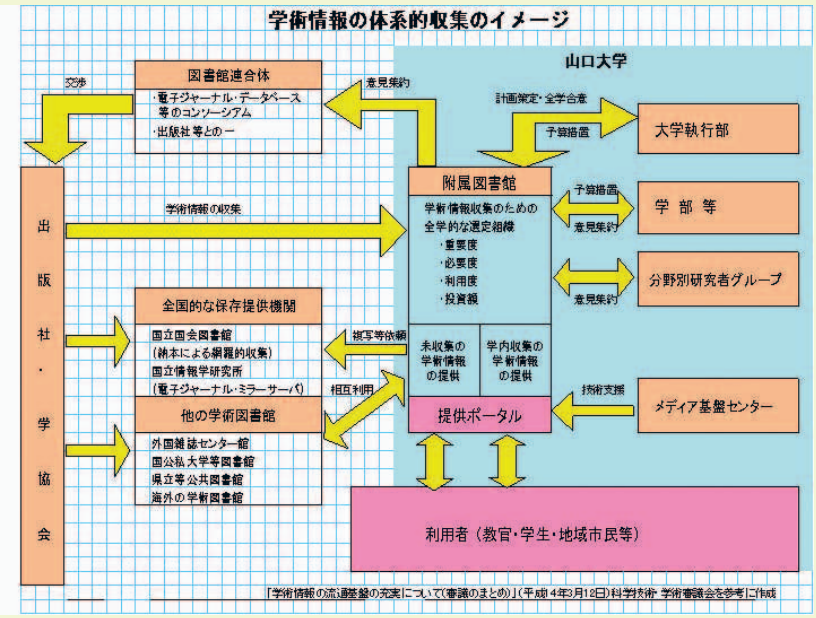
研究基盤資料の整備

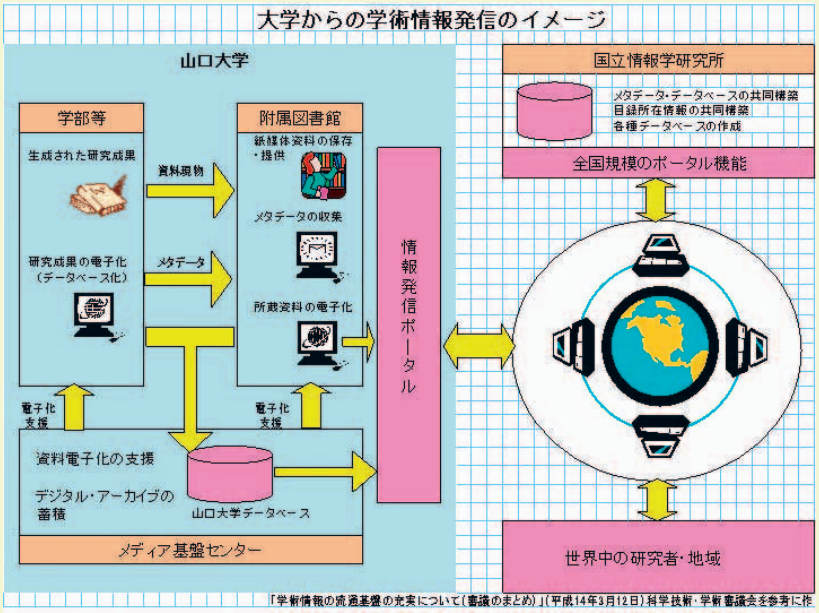
伊藤名大館長からは、名古屋大学における電子ジャーナル、データベースの整備に向けた学内体制整備をはじめ、国立大学図書館協議会としての全国的なコンソーシアム形成・拡大に向けた取組みを具体的にお話いただいた。森田徳大館長には、徳島大学のコアジャーナル整備経費の確保とその選定方法、電子ジャーナルへの切り替え状況をご披露いただいた。石黒委員には、本学附属図書館研究基盤資料選定ＷＧの検討内容と課題、全学的な資料収集体制の必然性を語っていただいた。立山副センター長は、情報化の意義、課題を整理されたあと、大学は、「有償・排他的な市場モデル」ではなく「無償・普遍的な情報流通モデル」を推進すべきとし、山口大学学術教育情報機構（仮称）の役割に言及された。

パネリスト（左から伊藤、森田、石黒、立山の各先生）



TOPICS





深まる関心

シンポジウムには、加藤学長をはじめ、３副学長、多数の部局長を含む教職員、学生等、百十数名の参加があった。会場からの質疑も活発に行われ、学術情報基盤整備に向けた関心の高さを感じた。大学が直面している２つの課題「学術情報の体系的な収集体制」「情報発信機能の整備」を山口大学において具体的に企画し、体制を整えていく契機となったものと考えている。

なお、シンポジウムの冒頭、学長の開会挨拶に続いて、10月から正式に利用開始となった引用文献データベースWeb of Scienceの開通式が行われ、加藤学長の著作を検索するデモンストレーションが披露され、好評であった。

最後に、本シンポジウムは、平成14年度学長裁量経費を得て実施することができた。学長及び関係各位にお礼を申し上げる。

TOPICS

山口大学の在り方を話し合う運営諮問会議

第3回運営諮問会議

法人化後の山口大学の将来像を検討

第2期第3回山口大学運営諮問会議が12月17日、事務局特別小会議室において開催されました。

前回第2回運営諮問会議では、大学側へ「法人化後の山口大学の在り方」について答申するための取りまとめ作業部会として、3つの検討グループ（中期目標評価部会、制度設計部会、大学間連携部会）が編成されたところです。

本会議では、大学から検討資料として示された「長期目標（案）」を基に、中期目標評価部会から『前文に山口大学として、特長あるものをもう少し加えてはどうか。また、山口大学の理念として、現在「発見し、はぐくみ、かたちにする」という立派な理念があるので、これをうまく活かして構成を考えてほしい。』など具体の意見が出されました。

制度設計部会からは、同じく大学から示された資料の「国立大学法人山口大学（仮称）の制度（中間まとめ）」を基に『学長、副学長、学部長等の権限と責任を明確にすべきである。また、提案されている運営組織図では、研究科・学部と学長の連携が明確でないため、学長直結とすべきである。』など、組織面においての提案がありました。

大学間連携部会からは、『山口県が整備したＹＳＮ（やまぐち情報スーパーネット）を使った遠隔講義や共同研究、県内の留学生受け入れ活動、附属学校を利用した交流人事等、山口大学が中心的役割を担ってほしい。』などの意見がありました。

今後、大学で進められる「長期目標」、「中期目標・中期計画」、「制度設計」の作成に当たり、今回の意見が反映されるよう求められました。

なお、次回の運営諮問会議は、平成15年3月4日㈫に開催が決まりました。

前回（第2回）の議事要旨は、別紙のとおり確認されました。

松野議長（左）と各委員

「理念を活かそう」と具体論の展開

（文責：総務部企画室企画係長　重本隆之）

TOPICS

第2回山口大学運営諮問会議議事要旨

日　時　平成14年9月17日㈫11時00分～14時45分
場　所　特別小会議室（事務局2号館2階）
出席者　松野浩二議長
　　秋本穣委員、岩田啓靖委員、佐々木孝治委員、髙石道明委員、中澤晶子委員、中東素男委員、福田百合子委員、藤井俊彦委員、星出文生委員
欠席者　なし
陪席者　小嶋副学長、平野副学長、丸本副学長、櫻井事務局長、三池制度設計副部会長、藤井目標評価副部会長、経理部長、学務部長、施設部長、企画室長、
　　その他関係者

議事に先立ち、小嶋副学長から挨拶があり、加藤学長が公務の都合で同席できない旨が述べられた。
続いて、松野議長から藤井俊彦委員（前回欠席）の紹介があり、同委員から自己紹介を兼ねて挨拶があった後、松野議長の進行で議事が進められた。

議　事　（◆は議長、◇は委員、○は大学側の発言を表す。）
冒頭で議長から、次のとおり挨拶があった。

◆　法人化も山場に差し掛かってきたところである。各委員からは、自由な御意見をいただきたい。
山口大学では、現在までに法人化準備委員会の目標評価部会と制度設計部会において２つの原案が出来ている。これを基に各委員からご意見を承りたい。その後で、本諮問会議としては、どのようなスケジュールでどういう形で答申をしたらいいのか、ということについて大学側から明確な時期の設定を示していただき審議を進めたい。
各委員においては、どういう形で大学側に答申していくのか。第１期と同様に運営諮問会議独自の答申を行うのか、又は、大学側と一緒になって審議していくのがいいのか検討してほしい。次にそのためには、第１期と同様に３つのプロジェクトチームにより進めてはどうか。１番目は目標評価、２番目は運営組織、３番目は教育改革であるが山口大学だけでは出来ないと思われる。山口大学においても、現在の７学部がそのまま存続することは考えられない。統廃合は必ず行われると思われる。また、学生の読み書き能力が非常に低下している。いわゆる教養学部の問題がある。こういうものを統合した、山口県における山口大学を中心にした教育連携の在り方を３番目の議案としたい。
以上の事項について検討していただきたい。

1. 目標評価部会の中間まとめについて
審議に当たり、山口大学法人化準備委員会の目標評価部会において検討が進められてきた経過報告について、小嶋副学長から資料1「目標評価部会の中間まとめ」により説明があり、藤井目標評価副部会長から補足説明があった。
続いて、審議が行われ、各委員から次の意見等があった。

◇　全体的には良くまとめられていると思う。問題は、具体的にどうするかということと、目標ということは経営との兼ね合いが出てくる。ある程度のシミュレーションをすべきである。教育改革をどうするかということから法人化の問題も出ているのではないか。山口大学が生き延びるためにはどうあるべきか、この中からどこを目玉にして、どうするのか。それが経営という面から見た場合に、どう反映するのかというシミュレーションも含めたやり方が必要になるのではないか。要するに、もう少しメリハリをつけ、なおかつ、非常にシンプルな表現であっても構わない。あまりにも多く書かれている。的をどこに置き、どうするのかということを考えていただきたい。
◇　資料１で「山口大学の進むべき方途」という部分について、現在ある「山口大学の理念と目標」の前文に記載されている精神について検討は行われたのか。山口大学がオンリーワンとして地域又は世界で役目を果たそうとするならば、どういう方向付けをするのか。どういう人にここで学んでほしいのか。送り出す人についてはどういう事を学んだかを言うことができる根本的な精神の言葉が込められているはずだ。そういう高い志を持った集団であり、そのようなものをここから創り出していくという意気込みを掲げていただきたい。
◇　非常に高い志が感じられる点では良いと思う。大学人として高いモラルを持つべき点は企業と同様に必要である。
全体としては、とりわけ力が入っていると思われるのは学士課程教育である。研究、地域貢献、国際交流、学内の組織等については部分的にユニークな面もあるが特徴的なものは見受けられない。
学士課程で注目するところは、学士課程教育の新展開の部分で「学習と教育の点検・評価・活用システム構築」と「教育スタッフ組織の再編」のところである。修士課程との連携を重視した６年一貫教育ということであるが、教育の面で山口大学を極めて特徴のある大学とするには、この部分が大事である。教育については、それぞれのコースや課程ごとの目標をはっきりと決め、その目標がどの程度達成されたか評価できる仕組みを作り、それを実現するために教員の組織を編成替えし、教員の働きに応じて処遇するというところである。なお、処遇に関しては今後議論することになろう。
ユニバーシティー・プロフェッサー制度の導入等と併せて「教育クラスタ」という新しい考え方がされているが、学士課程教育をはっきりと評価できる仕組みにするということについては他大学でも出来ておらず、国際的なスタンダードを考える際にはこの点が非常に重要となる。学生にも自分の学ぶ目標がはっきり見え、教える側にもそれがはっきりしており、周囲の第三者にもそれがはっきり見えるという点で、この目標が実現されれば山口大学は、非常にユニークなオンリーワン大学と成り得ると思う。
◇　全体的に網羅的に書いてあるように思える。社会が一番評価する人間は、受動的な人間ではなく、能動的な人間である。そういう

TOPICS

人間をどのようにして育てるかが大事である。良い理念は書いてあるが、社会に出て自分がそこでどのような問題点を発見し、発見したら直ぐに行動する人間が必要とされている。上から言われて行動する人間はいらない。そういう（能動的な）人間を創り出してほしい。そのあたりをもう少し強調してはどうか。また、育てるということは若干思い上がりであり、育つようにする。育つということはやる気を学生に起こさせることである。そういう観点を入れていただきたい。

◆　これは誰に読ませるためのものなのか。皆さん（学内の各委員）の意見を全部入れておられるのではないか。項目が多すぎるので１／３位に縮小して、ポイントを絞るべきではないか。この内の８割は他大学でも同じ事を書いていると思う。その中で特色を出し、誰に読ませるかということが問題である。文部科学省のヒアリングのためではない。

◇　経営のシミュレーションを念頭に置いて作っていくということは、極めて重要である。

結果的に、学生が集まらないと大学の存立はあり得ない。自分が学部なり大学院に入ろうとしたとき、これを読んだら１００％山口大学を選ばない。何を言おうとしているのか分からない。これからまとめるにしても、この段階でもきちんと考え方を総括しておくべきである。

学部４年間に関してはどうするのか。サラリーマンになる人、はじめから何か自分で業を起こすベンチャービジネスをねらっている人達、そうではなくＭＢＡであるとか、公認会計士、弁護士をねらうプロフェッショナルなキャリアを目指す人達、研究者を目指す人達、その人達を最初の１～２年でコースを明確に本人達を納得させて選ばせて、それに一番良いカリキュラムなり指導が行えて、しかも本人達が希望する最も良いところに行ける。要するに進学する者、社会に出る者にそれぞれ必要なものを全部与える。４年間のお金と時間の投資に見合う以上のものを山口大学は与えることが出来るということで自分は山口大学を選ぶこととなる。そのような観点からこれを見たとき、この大学に入ってどういう勉強ができ、自分自身にとってどういうプラスになるのかが分からない。

他校との連携とか一定のグループのメンバー校になり、その間では単位の互換など自由に行うことは進めるべきである。「やまぐち学」とか山口県に根ざすということならば、地方にコミュニティーカレッジを作るとか、県内の大学と連携しキャンパスを使わせてもらうとか、そこで取得した単位を有機的に連携することはできないか。

学生の観点からすると、４年間の時間も投資するがお金もかかる。キャンパスには教職員が相当数いるはずであるが、極力学生アルバイトを使ってはどうか。公務員給与からすれば、学生を雇えばはるかに安くなる。キャンパスで学生が出来る仕事は沢山あるはずである。学内でアルバイトができれば時間的なロスも少なくなる。

奨学金制度については現金を渡すことは難しいとしても、授業料の減免は非常に有効な方法であるが、両親の所得を考慮した方法ではなく、学力優秀者（競争）を優先した制度とすべきである。

学生の立場からみて魅力ある山口大学であるには、設備や生活指導に関するサービスも重要である。

◇　学生の立場から考える事は重要である。大学を選ぶとき何を基準に選ぶかというと、大学の医療制度や宿泊施設など、留学生に対しても同様に、生活面の基盤がしっかりしていることが大切である。

他の県内大学との連携についてもどういう関係になるのか、学生が納得いくよう単位の関係や教育面の互換性も含めて、何が学べ、どういうことが身に付くのか、具体的な形が見えることが大事である。その上で理念ということが言えてくるのではないか。

また、大学の立地条件から考えて、中国、韓国を含めた東アジア圏により近いということを含めた連携を打ち出していくことが具体的なことではないか。

◆　国際化を考えると医学部などはアメリカとの連携が一般的である。山口県の立地条件からすると東アジアを前面に打ち出せば特色が出るのではないか。中国の山東省に山口会館を、山口県に山東会館を作り産学共同センターということにし、勉学と生活支援もできる３点セットのようなものがあれば、行くのなら山口へ行くという形も見えてくる。このような方向を考えないと山口県も山口大学も今からの未来はないのではないか。

一般的な表現ではなく、具体的な特色を出した表現を考えることが大事である。

◇　このまとめで非常に気になるところは、欲張った総花的な作文になっているように思われる。強い大学になろうという感じを受ける。優れた大学がオンリーワン大学というキャッチフレーズというか一つのキーコンセプトの中で仮に考えた場合、どういう思いが込められて議論されているのか。地域社会の中では１番大きい規模と資源を持った大学であり、これが一つの地域のマーケットに入ってきたとき、強さをもって他を圧倒する経営もあり得る。新設大学も含め県立大、私立大、専門学校などからすれば脅威になり、心を許せない雰囲気というものを作り上げていくのではないか。そのような方法には反対であり、山口県の置かれている環境は、大阪、名古屋、北九州のような都市化した環境ではなく、ローカルな地域社会なので、山口大学がひとつのネットワークのセンターとなるようなシステム構築を目指してほしい。

オンリーワンという言葉は、研究の分野における個性、山口大学としては他にない個性という言い方は、あまり実体的な内容がないのではないか。山口大学が山口県という地方マーケットの中で排他的に支配していく方向でいくと周辺大学等とトラブルが発生する。そうではなく山口大学をひとつのキーセンターにした教育システムの核となるように、従って、オンリーワンというキーコンセプトはもう少し丁寧な説明が必要である。

経営との突き合わせというか、現実的なシミュレーションが行われた上での理念の構築なのか読みとれない。それが分かってくると、県立大、私立大、教育委員会や行政と一緒になって山口大学のことを考えやすくなる。

また、大学の魅力ということの中には、教育・研究の可能性が意識されることは当然であるが、山口大学と県、市の地域社会との関係で高度な洗練された地方文化センターやスポーツ施設でメインとなるような展開を持った経営方針は、地域にとって非常に魅力的で大切にされる大学の方向ではないか。つまり、研究と教育に専念するという標榜だけでなく、地域社会のアメニティーも責任を持って引き受ける大学を創っていくという視点を強く押し出していただきたい。

◇　地域との関わりが強調されているが、全体の分野の中で、地域に根ざした山口大学か、山口大学がたまたま山口という地域にある大学なのかという２通りが考えられるが、それがミックスされているのではないか。私たちが考えるのは、山口大学は山口県という風土の中にある大学として、他の大学ではできないことがここではできるということが、具体的な各論の中で出せるかが問題である。小・中・高校では総合学習が始まっており、特徴を出せるのは総合学習を通じ、その実践を通じて何を学ばせるかということが一番特色を出しやすいのではないかと私は思っている。そういうところから、山口大学のキャンパスの中や地域の中で学ぶということに

特徴があり、また、本当の力となるのではないか。アジアとか国際交流は当然行っていくが、大都市とは違った山口という地域の特徴をどれだけ探せるかということではないか。

◇　これ（中間まとめ）をみて、何かが少し足りないのではないかという気がしている。現在の課題としては、大学の理念の中で環境破壊の問題を提起されているが、少子化ということも分析して将来解決していくことも大学の役目ではないか。この辺りが不足しているのではないか。従って、新たに、現在のけわしい社会を見つめ、新しい社会を構築していく人材の育成という事項を付け加えてはどうか。内容的には現在の課題として挙げられていることや少子化の問題あるいはボランティアの考え方であり、将来は義務付けられたボランティアもあるのではないか。

次に、山口大学の位置付けとして、将来像としては山口県の山口大学ではなくて、もう少し広く中国地方又は四国、近畿を加えた、あるいは日本全体という広い視野を持つ必要があるのではないか。

入試にしても、山口県にとどまらず中四国、九州辺りの進学校にも推薦１名を依頼するとか、人材を外に求めることも将来の山口大学として必要なのではないか。言うならば、山口県内の問題でなく、日本の山口大学という観点で考えていかないとどこかで行き詰まるのではないか。

2.「国立大学法人山口大学（仮称）」の運営組織（中間まとめ）について

山口大学法人化準備委員会の制度設計部会において、検討が進められてきた経過報告を、平野副学長から資料２「国立大学法人山口大学（仮称）」の運営組織（中間まとめ）により説明があった。

続いて、審議が行われ、各委員から次の意見等があった。

◇　役員会というものをつくるということになっているが、これは執行機関と想定してよいか。
○　特定の重要事項について学長の意思決定に先立ち議決を行う形になっている。
◇　評議会とどちらがということは問題になるわけであるが、審議事項はあらかじめ決まっているので、オーバーラップしないようにすべきだ。
○　今後、その審議事項について具体的な事項を決めていくことになるが、オーバーラップする場合にもどのようにするのか検討していく。
◇　評価委員会の位置付けについて説明していただきたい。
○　評価委員会は、学長の下に独立した委員会として組織するとしている。現在でも評価についてはどこかの副学長の下に置いてということではなく、学長の下に直接の委員会として評価委員会を設けている。現在の委員会と同様にはいかないかもしれない。
◇　評価の内容又は業務を説明願いたい。
○　現評価委員会が教育、研究、学内運営という区分についてそれぞれ詳細な項目を定めて提示しており、それに基づいて学内で実施している。
◇　それはあくまで学内のものか。
○　これは学内のものである。これに基づいて報告書を作成し、第三者評価を受けることになっている。
◆　副学長５人は学外も含めて５人なのか。そのうち少なくとも財務担当、労務人事担当は学外の経験者が必要ではないか。
○　この５名体制の中で学外の方も想定するという前提にはなっている。
◇　副学長は法令で決まるのか。何名ということになっているのか。
○　法令事項であるが、大学の規模等に応じて定められると思われ、現時点では５名を前提として議論している。
◇　この組織で、現行と比べ人員やそれに関する経費はどうなるのか。企業ではリストラなどしてスリム化し、効率を上げることを一生懸命やっている。だんだん重装備になっているのではないか。
○　法人化後は、運営費交付金の中に人件費も校費（研究教育費＋運営費）も含まれる。今までは人件費は人件費のみの形で予算化されていたが、今後人件費も研究教育費も一括の形でくることになり、全てその中でやり繰りしなければならなくなる。人件費が増えれば研究教育費は当然減ることとなり、人件費を抑えれば研究教育費が増えていくという構図になっている。
◇　午前に議論のあった目標を具現化するためには、組織としてこういう形になるということであるが、経営的条件を織り込む場合にどうなるのかということがある。

もう一つは、教員の質の問題があり、それをどう向上させるかということがある。評価委員会との関連も考えられるが、評価を学内だけで行うといい結果にならないのではないか。例えば、論文を出しても、出したからいいのではなく、その論文が本当に再引用され、どんどん活用されればいいのだが、論文を年間に何件出さなければいけないという格好だけだと評価には値しない。そういう事が質の問題にも関わっていると思われるが、そのあたりを表面的な問題だけではなく現実的に考えていくべきである。

○　運営費交付金として大学全体の評価を受けることとなる。大学内部でどういう形で人件費に反映させるのかということについて、教育能力、研究能力あるいは事務能力というものをきちんと評価し、給与に反映していくシステムを作らなければならない。大学として評価する場合と大学全体を国又は第三者が運営費交付金の算定に当たって評価する問題と２つの面があり、競争社会の中で生きていくという前提がある。
◇　質の問題に関連して思うのは、結局人をどうするかと言うことで、機構、組織を作るというよりも、誰が何をして、それを誰がきちんと評価して、よりいいものにするのかということがある。当然教職員の人事の問題とも関連するし、現行でも多少行われているが任期制が入ってくると思われる。そのあたりで今後どのようにして保証していくのか、その保証があってこのような組織が活きてくるということを、目標のまとめなり、あるいはこの案に入れていただきたい。
○　この中間まとめは運営組織についてだけであるが、人事制度についても検討に入っており評価や任期制について議論しているところで、次の第３次案ではお示しできると思う。
◇　この中間報告では、「部局長は、部局構成員の意思を尊重して部局の意向を大学運営に反映させる。」とあるが、これは従来の方法を踏襲した考え方である。しかし、法人化後の大学運営はこれでいいのか。

TOPICS

この組織概略図では、学部、研究科の部分は変化もないように書かれているが、例えば、学部組織を大幅に変更して、学生やサービス享受者に分かりやすいコースやカリキュラム、さらに教育クラスタという考え方を導入するならば、学部と研究科を切り離すことは考えられないか。

その理論でいけば、「部局長は部局の意向を大学運営に反映」というよりも、逆の方向に部局長の役割を位置付けるべきではないか。是非、議論していただきたい。部局長は、大学の経営運営方針について構成員の意思を尊重しつつではあるが、部局運営に反映させることとすべきであり、そうでなければ構造改革の実は上がらない気がする。

○　そこのところは議論を重ねているところであり、特に経営面については全学的な観点が大事と考えており、さらにご意見をいただきながら検討を進めていきたい。

◇　目標評価部会中間まとめに関連して、ユニバーシティー・プロフェッサーという制度、つまり学部・学科に所属しない新しい雇用形態を設けた場合に配置するセンター等はどこに位置付けられるのか。

２点目は、教育クラスタについて、本来学部・学科に所属してということと、もう一回横断的に組織化し教育上の責任を持つとあるが、どういう仕組みで運用されるのか。

３点目は、労務人事担当の副学長が予定されているが、労務管理とか人事というのは生産企業等では分かるが、大学で労務というときどういう意味があるのか。今後非公務員型の職員となったとき、例えば外国人の雇用など行われると思うがそのようなときの給料の処遇とか服務とか、あるいは部局等の定員管理とか、そういう意味合いのものか。

○　１点目について、現在でも、大学教育機構には学部に所属しない教官がいる。ユニバーシティー・プロフェッサーについては、大学教育機構の中に入ることとなると思われる。法人化後は、従来の定員管理がなくなるので、それに代わり暫定的にも学内で教官配置数ということは決めていく必要がある。任用上はそんなに困難な問題は伴わないと思われる。

３点目の労務人事については、教官だけでなく職員の採用形態も非常勤職員も含めいろいろな職種、形態があり、服務規程等も大学独自で定めることとなる。その場合、就業規則づくりにしても大変な作業であり、経営という観点からしても労務人事担当の副学長の下で対応していく必要があると考えている。

○　２点目の教育クラスタについては、現在、存在しているわけではなく、組織としてこのようなものを作るかどうかまだ決まったものではない。従来、一般教育では全学出動体制において学部が部分的に責任を持っていたものを、授業科目別部会を新たに組織し教育本位に授業科目本位にその部会が責任を持つという体制を作っている。当面、教育クラスタという明確な組織ができるかはともかく、既に運用的な方法で行ってきており、運用的な組織としては可能と考えている。

◆　大変重要な話である。私の理解だと例えば、数学の先生が母体の学部を離れて１つのグループを作るという意味で、一般教養も含め教学や研究を新しい横の組織でやっていくということなのか。

○　そのとおりである。

◆　先生方は会議に出席し、学生に授業し、研究開発も行い産学共同もやるということは忙しすぎるのではないか。人の働きの機能をもう少し限定しないとみんな中途半端な気がする。例えば研究のみで厳正に評価される人がいてもいいのではないか。

◇　学長の選び方のところで、教員以外の職員も関与させることが書いてあるがいいことだと思う。ただ、関与の仕方が意向聴取程度でよいのか議論の余地がある。かつては、組合との対立とか学生運動とか、特に学生の意向についてはナーバスになっていたが、少なくとも教員、事務職員や他の職員も含めて学長選挙に関与させることは、意向聴取を踏み出しても良いのではないか。

◆　会社では、社員が社長の選任に関わることはない。それをやると収拾がつかなくなる。それから、やたらと副が付くのを置かない方がいい。

◇　副学長５人の役割分担を明確にする必要がある。役割が明解でないと下の研究科・学部との関係がどうなのかが見えない。副学長との関係が明確でなく責任も不明確である。その辺りを関連付けて権限と責任を明確にしないといけない。

◇　これまで総合大学は、学部があって大学なしと言われてきた。今回の改革の根本には、従来の弊害を打破しないと新しい方向には踏み出せないという思想があるはずである。この中間まとめでは、経営の中枢を強化する案になっているが、本当に強化しただけの力が発揮できるのかが問題である。

◆　現在、副学部長は置いているのか。

○　工学部に例がある。

◆　副はやめた方が良いと思う。

◇　私も賛成する。企業でも副があるが、そこが何の仕事をしているのかもうひとつ明確ではない。大学の組織としては、書かれているように柔軟でシンプルをモットーにして、実態を踏まえてでないと重装備になってしまうのではないか。できるだけ段階を少なくしないと、意思決定をするにしても双方で意見の食い違いが起こると学長もやりにくくなるのではないか。

◇　従来は下の各学部と上の学長とを繋ぐ組織としてたくさんの委員会があった。委員会で各学部の意見を調整する過程を経て、最終的に評議会で決めてきた。今回の場合、こういった中間組織を思い切って整理する必要がある。

◆　言われるとおりである。従来、学長選挙の投票権を教授から助手まで持っていたわけで、学長もその辺は配慮されていたと思われる。今度は、学長の選挙については、選考委員会で進められ、大学の意思決定も役員会が最高意思決定機関として機能する仕組みになっている。実際に大学の方針を下に伝え、そのとおりに動くキーポイントは人事権とカネである。役員会に明確に人事権と予算の配分権を与え、既得権益の積み重ねで予算を配分するのではなく、重点的に配分するような権限を付与すべきである。これを役員会、特に学長に与えるべきである。そして間違いのないように監事が監査する仕組みになっていると思う。

もう一つ言うと、財務については、今まで大学では保有している膨大な資産を評価し計上して減価償却していくということは行ったことがなく、至難の業と思う。これはプロでないとできないと思われる。組織の改廃とは別に、なるべく早く財務のプロを人選し資産評価を行う必要がある。

◇　総論はいいが、各論になると民間企業人としては理解できないところがある。企業経営の中核を成す企画運用に当たるところが総務担当で全て行うようになるのか。これを見た限りでは、この組織でどのように機能するのか分からない。権限と責任が明確化されていないと責任追及もできず信賞必罰もない。クリティカルな目標管理はどのように行うのか。

TOPICS

全ての責任は学長に返るわけだが、それを補佐する者についても権限とともに責任も明確にしておかなければいけない。大学という教育産業として成長していこうとするならば、こういう体制でいくのだというものが見えてこない。これでは、大学として生き残ることは極めて困難だと思う。

私は現在、東京都港区でオンブズマンをしているが、一例として、中学の生徒一人当たりの平均コストは東京都全体で１３０万円、港区は２２０万円である。私立では一人当たり８０万円以上かけたら倒産すると云われている。区は私立の３倍のコストを使って、区立の小学校から卒業する５５％が、８０万円しか生徒一人当たりに経費を掛けない私学に進学する。そのくらいのコストを掛けても私学に負けている。これは、東京都や港区に人材がいないからであり、意識をもって経営をしていないからである。このままで行ったら山口大学も同様に競争に勝てないのではないか。

◇　財産評価については、現在、事務局経理部で相当努力され進められていると思う。

◇　この中長期計画を立てるに当たり、私学の財産運営、学生一人当たりの年間経費、年間支出がどうなっているか等は調べたのか。私学の方は常識的で非常にはっきりしている。教育の善し悪しは別として、経営に関しては国立大学と比べはるかに進んでいる。キャッシュフローに対してものすごく敏感である。その上で、経営とのシミュレーションを念頭に置きながら組織も考えていかなければならない。

◇　事務組織については、私学と比較する事は非常に重要なことである。今回の改革案では、副学長の下に事務組織を直属させることとなっているがいいアイデアと思う。これで分かりやすいシンプルな、経営に直結する事務組織として機能するのではないか。

関連して業務のアウトソーシングが述べられているが、実際思い切ってどこができるのか具体的に考えて見えるようにしていただきたい。

◇　改革に際して、一番に長としてやりやすいことは、権限と予算である。この二つがあれば思い切った改革もできる。そういうものを与えられる組織が必要なのではないか。

◇　アウトソーシングは定型の業務はどんどんやるべきである。しかし、大学の経営の中に若干でも関与するようなものは少し難しい。定型的なもの、例えば、給与計算などはできるはずだ。

◆　企業でもアウトソーシングは進められており、大学でも考えていくべきである。

ところで、県立大学の職員は山口県の職員なのか。

◇　山口県の職員であるが、教育委員会の先生と同じように位置付けられ、一度出向という形になっているのではないか。

◆　山口大学と県立大学の事務はある意味では統合できるのではないか。

◇　不可能ではないと思われる。例えば物品購入、図書の管理、研究所の運営管理などは問題ないと思われる。

◆　大学の方ではアウトソーシングについて、今まで検討してきたのか。

○　これまで一般的なものでアウトソーシングしているものはあるが、それも定員削減対策としてのアウトソーシングであり、大学の戦略的管理運営の根本として考えたことは今までない。現在の公務員制度では、身分が保証されているので、退職するまでは人を切るわけにはいかない。法人化後の平成１６年４月の移行時においては、全員職員を引き継ぐこととなるので、移行時点で行うということは無理だろうと思うので、第１期の６年間でどうやっていくか中期の戦略として検討していくこととなる。

◆　話は変わるが、この前広島大学の附属小学校の話を聞いた。広島大学の場合、教育学部と附属小学校は並列組織になっている。山口大学の場合は、教育学部の下に附属がある。従って、附属の運営は教育学部長に任免権もカネも持っていることになる。広島大学の場合は、教育学部とは別組織になっている。組織としては、その方が動きやすいと思われる。

○　附属学校は各大学によって違いがある。山口大学の場合は、基本的には県の教育委員会の人事システムに任せているので、学長や学部長に人事権はない。大学によっては、一部で交流人事をやっているところもある。ここのところは非常に微妙で、大学として附属学校で採用すると長期間附属学校で雇用していくこととなる。教育委員会に任せた場合は、３～４年で交流が行われるため、附属に対するロイヤリティーという問題も生じてくる。

◆　いろいろ問題はあるが、このあたりで次回の第３回運営諮問会議で答申をするに当たって、会議の冒頭で申したことについて、ご意見をいただきたい。

議長から上記のとおり諮られ、審議の結果、答申については大学側で検討された案に対して運営諮問会議として意見を述べる形とし、１１月末を目途に取りまとめ、次回（１２月）で審議のうえ正式答申することで了承された。

なお、答申の取りまとめに当たっては、３つのプロジェクトチームを設け、それぞれ担当の副学長と連絡を取りながら進めていくこととし、担当の委員は次のとおりとされた。

①中期目標評価部会　（担当委員：髙石、中東、福田　　担当副学長：小嶋）
②運営組織部会　　（担当委員：秋本、佐々木、中澤　担当副学長：平野）
③大学間連携部会　　（担当委員：岩田、藤井、星出　　担当副学長：丸本）

3. その他

次回の開催日を、１２月１７日（火）とした。

TOPICS

図書館だより

オープン・ライブラリー 2002盛況

■石井　道悦　附属図書館情報サービス課長

2年目のオープン・ライブラリー

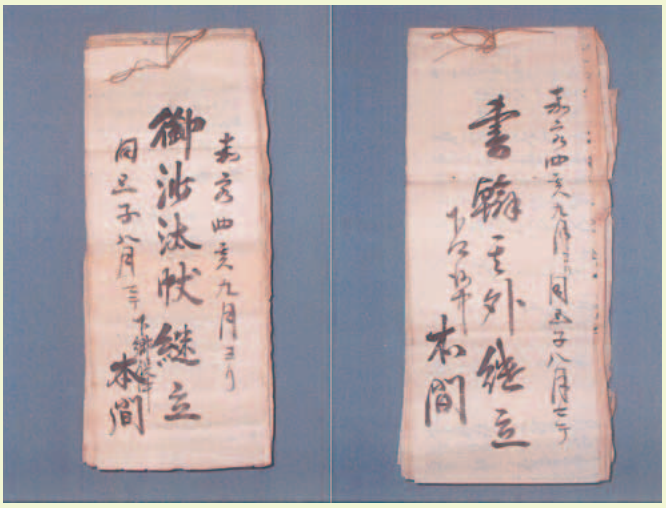
去る11月3日(日)、吉田キャンパスの大学祭〈姫山祭〉にあわせて、附属図書館は「オープン・ライブラリー2002」を開催しました。オープン・ライブラリーは、昨年に続いて2回目の開催で、今回は、「所蔵貴重資料展」と「デジタル・ライブラリーへの招待」をあわせて実施しました。

当日午前中は生憎の雨で人出が心配されましたが、図書館前広場には姫山祭の人気イベント「品川庄司ライブ」に多くの市民が集まりました。折角の人出を前にオープン・ライブラリーも急遽時間を繰り上げ、10時30分過ぎからオープンしました。雨の中、図書館の2階ベランダは、品川庄司ライブの絶好の観客席となりましたが、その前後には、図書館の貴重書展示やデジタル・ライブラリーにも興味を持たれた多くの方にご覧いただきました。幸い、午後には雨も上がり、客足もさほど落ちず、当日入館者800名余り、そのうち一般市民は150名以上（資料展受付の推計）となりました。

今回の貴重書展示も、昨年の林家文書（小郡町仁保津の旧家、林家旧蔵文書）の絵図に続いて、山口ゆかりのものとしました。展示資料は、山口高商と山口明倫館蔵書及び棲息堂文庫（徳山毛利家旧蔵書）より12点、今年寄贈を受けた本間家文書（山口市嘉川の旧家、本間家旧蔵文書）補遺分より、幕末明治の史料6点と明治期の古写真3点とし、解説目録を作成・配付しました。今年も、解説目録を参照しながら展示ケースをのぞきこみ、係員に質問される熱心な参観者が見られました。

デジタル・ライブラリーとしては、1階カウンターにパソコンを6台並べて、本学で利用できるデータベースや電子ジャーナルとネットワーク貴重書展（全国の大学図書館がそれぞれのHPに公開している電子資料閲覧）を公開し、参観者に実際に操作していただきました。こちらの人気は、ネットワーク貴重書展と本学所蔵の林家文書高精細デジタル絵図で、次々とネットサーフィンされる参観者も見受けられました。また、一般市民の利用受付と館内ツアーを実施し、十数名の新規利用者登録と利用カードを発行しました。

電子図書館を体験するハイブリッド・ライブラリーコーナー



本間家文書（新出寄贈分）展示資料
「御沙汰状継立 下郷役中・本間」（左）、
「書翰其外継立（下郷庄屋役中）」嘉永4(1851)年（右）

TOPICS

山口大学附属図書館の地域公開

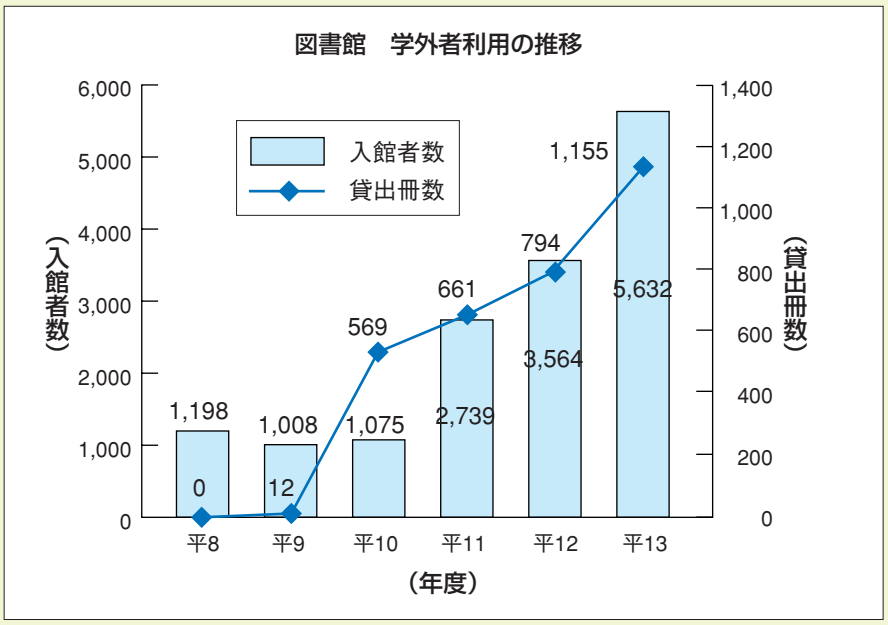
山口大学附属図書館は、従来より学外者の「館内閲覧」「複写」利用を認めていましたが、山口県下最大の図書館として地域へのサービスが重要であるとの考えから、平成10年1月には、一般市民を含む学外者への「館外貸出」を開始しました。これは、国立大学附属図書館としては極めて早い時期に実施に踏み切ったものです。（工学部分館は平成11年4月、医学部分館も平成13年4月から、学外者への館外貸出開始）

この方針は、平成13年3月に策定した「附属図書館の理念と目標」にも明記され、理念のひとつに「知識を共有する：地域社会・国際社会への知的情報の発信を支援し、地域の人々との知的交流に貢献します。」を掲げ、目標には「地域市民への利用開放と生涯学習機会の提供の推進」「地域の大学図書館、公共図書館との相互協力の強化」を掲げました。ここ数年、附属図書館の学外者利用は順調に伸びておりますが、まだまだ「大学の図書館は利用できない」と思い込まれている方が大多数です。オープン・ライブラリーは、大学図書館の存在と一般市民も利用できることを知ってもらい、図書館を地域の人々との知的交流の場へと発展させるための試みのひとつです。

貴重な資料をのぞき込む入館者

社会の多様化、高度化、高齢化等に伴い、生涯学習は今後ますます重要性を増し、大学図書館の持つ学術資料に対する一般市民の利用要求はさらに高まると思われます。学生－研究者－地域市民の知的交流の場＜知の広場＞の構築をめざして、大学図書館は、進化・成長していく必要があります。

（TEL: 083-933-5180）



TOPICS

国際交流

日本留学フェアー ホーチミン市（ベトナム）に参加して

■中村　幸士郎　留学生センター長

日本留学フェアーは、毎年世界の数都市で開催され、日本への留学希望者や進学指導者等を対象に、日本の高等教育機関の最新の情報を提供し、日本への留学を促進することが目的です。主催は、財団法人日本国際教育協会（文部科学省の留学生関係外郭団体）と地元の高等教育機関で、後援は日本大使館や領事館です。今回は日本の45大学（国立29、公立1，私立15）が参加しました。

実は、今回タイ首都バンコク市とベトナム南部のホーチミン市で連続して開催されましたが、山口大学からは後半のホーチミン市のみに、伊藤良子さん（人文学部学務係）、藤山景子さん（留学生課）と私の3人が出かけました。

ホーチミン市（人口522万人）での日本留学フェアー開催は珍しく、今回が２回目とのことでした。大使館のある北部のハノイ市に比べ、ホーチミン市では日本語熱が高く留学希望者が多い割には、留学情報が届いていないそうです。実は2年前から、財団法人日本国際教育協会の前専務理事の若林元氏と、文部科学省の長川英樹氏から、私は個人的に依頼を受けており、今回やっと実現しました。ベトナムの学生は勉学第一で勤勉で成績がよいのでぜひ多数受け入れてほしいと依頼されています。

ホーチミン市内をゆうゆうと流れるサイゴン川

ホーチミン市で開かれた日本留学フェアー

山口大学ブースの様子

10月30日㈬と31日㈭の2日間にわたり、夜の8時まで店開きしました。テーブルに山口大学英文案内と各学部・研究科のパンフレット類を並べ、背後に山口大学の校旗、両側に五重塔と錦帯橋の特大カラー写真を配し、両袖は地図とうちわで飾り

TOPICS

付け、なかなかの雰囲気を作り上げました。来訪者総数は1,873名で、山大関係は約400名、2日間資料の配付と個別の面談に追われ汗を拭く暇もなく声をからす大盛況でした。左右の広島大学も佐賀大学もセンター長が大張り切りでした。応募者増を期待しています。

日本への関心度

フェアー前後にも総領事館や大学を訪ね、留学生の派遣依頼と情報収集を行いました。10月31日㈭早朝には神谷総領事と荻野副領事に、11月1日㈮にはホーチミン市社会科学人文大学（現地最大の国立大学）のラム国際関係学科長に面談しました。各種情報の中で興味深いのは下記の通りです。

日本に来ているベトナム留学生数は900人で全体の1.2%。ホーチミン市の日本語人口は8千から1万人。社会科学人文大学東洋学部日本語学科の学年定員は約100名で計400人在籍。貿易大学にも日本への関心の高い学生が約500人。ホーチミン工科大学の学生数は8,000人で日本の高度技術に関心が高い。同市のさくら日本語学校でも多数が日本語を学習中。2020年の工業化によるWTO加盟を目ざし教育による人材育成が重要課題。日本も人材協力センターを設け支援を増強中だそうです。

ボーさん宅の食事に招かれ大にぎわい
（左から2人目が筆者）

まちの様子

町はベトナム戦争の傷跡としての貧しさは隠しきれませんが、人々の表情は明るくバイクが洪水のように溢れ、高層ビルも建ち始めています。フランスの植民地の影響もあり、水道水は安全で料理は美味しく、女性はアオザイをおしゃれに着こなしさっそうと歩いています。

教育学部４年生のボーさんの家に２回も食事に招かれ予期せぬ驚きでした。ボーさんの曾祖父がベトナム語の文字を発明した著名人であることも大発見でした。

「山口は勉強に適した静かな緑の町です」と山口大学をPR

【ベトナム】
ベトナムはインドシナ半島の東に位置し、北は中国、西はラオス、カンボジアと国境を接して、東と南は南シナ海に面しています。南北に1,650キロの細長い国土で、3/4は山岳、広陵、高原地帯。

位置	北緯8度33分～22度22分 東経103度27分～109度28分
面積	33万㎢
人口	約7,770万人（'00年）
GDP	32,903百万米ドル（'01年）
政体	社会主義共和制
首都	ハノイ（人口230万人）
言語	ベトナム語
主な宗教	人口の80%は、仏教徒、 その他キリスト教徒（カトリック）
主な対日輸出品	繊維製品、魚介類、原油
主な観光地	ハノイ、ホーチミン、フエ、ハロン湾

TOPICS

山口大学外国人留学生懇談会

太鼓や踊りで温かい雰囲気

■宮崎　睦美　学務部留学生課留学生係長

山口大学外国人留学生懇談会は、本学に在籍する外国人留学生と外国人研究者を激励し、交流を促進するため、学長主催により毎年実施され、留学生の増加に伴い、年々にぎやかに行われています。

今年の留学生懇談会は、本学留学生会と留学生支援ボランティアの学生により企画され、2002年11月25日(月)に次のようなプログラムで開催されました。

2002年度外国人留学生懇談会プログラム

楽しいこと苦しいことなど留学生の体験を話し合う

第一部　パネルディスカッション　及び　文化紹介

16：00～17：20　大学会館

総合司会　橘谷 キアン エルナン アルマンド　農学部研究生　ペルー
平林　真琴　教育学部国際理解コース４年

1.パネルディスカッション
テーマ　「私の留学体験から」
司　会　徐　玉　恵　経済学研究科修士1年　台湾
畑　田　健　経済学部国際経済学科４年
パネラー　顧　令　儀（コレイギ）　人文学部４年　中国
譚　鵬（タンホウ）　経済学部４年　中国
崔　英　俊（サイエイシュン）　医学研究科博士課程１年　中国
EUGENE GONZALES CRUZ（ユジン ゴンザレス クルズ）　工学部４年　フィリピン
MAKOCHEKANWA CASTEN（マコチカンワ キャステン）　理工学研究科博士後期課程２年　ジンバブエ

2.三味線・箏・十七弦の三重奏　邦楽部
曲　目　『木もれび　－光と波と－　』
演奏者　三味線　伊藤佐紀子　人文学部３年
箏　中島まゆ子　人文学部３年
十七弦　吉田　聡子　農学部３年

三味線・箏の日本音楽を演奏する学生

3.尺　八
曲　目　五月のうた
演奏者　仲村　博門
理工学研究科博士前期課程２年

4.太　鼓
演奏者　MAKOCHEKANWA CASTEN（マコチカンワ キャステン）
理工学研究科博士後期課程２年　ジンバブエ
LUZIGA CLAUDIUS（ルズイガ クラウディウス）
留学生センター日本語予備教育生　タンザニア

軽やかなリズムに乗って踊りを披露する留学生

第二部　懇　親　会

17：30～19：00　第二学生食堂

総合司会　橘谷 キアン エルナン アルマンド　農学部研究生　ペルー
平林　真琴　教育学部国際理解コース４年

TOPICS

1．学長挨拶
2．留学生会会長挨拶　ASIKIN BINTI ABDUL RAHMAN（アシキン ビンディ アブドル ラーマン）
経済学部経営学科４年　マレーシア
3．大学教育機構副機構長　丸本　卓哉副学長　乾杯挨拶
歓　談
各国留学生からの出し物（太極拳）
4．国際交流委員会委員長　平野　充好副学長　閉会挨拶

「健康第一」と太極拳の演技

お茶の接待を受けて日本の心を学ぶ

お国自慢の正装で深まる友情

「これで撮って」とカメラを差し出す留学生の家族

第1部のパネルディスカッションでは、パネラーの5人の留学生がそれぞれの体験から、日本語の重要さとコミュニケーションの大切さが提起されました。日本の伝統音楽を邦楽部の三味線・箏・十七弦の三重奏、尺八の演奏で堪能した後、ジンバブエとタンザニアの留学生による太鼓と踊りに会場は温かい雰囲気に包まれました。

第2部は第二学生食堂・きららに会場を移し、外国人留学生・研究者・その家族の参加で大変賑やかな懇談会になりました。民族衣装を着た留学生も多く、日本人学生・教職員、地域の支援者や山口県内の高等教育機関に在籍する留学生の参加もあり450人を超える参加者で賑やかに交流が行われました。

会場では、和服姿の女性職員によるお点前でお抹茶の接待があり、順番待ちの列ができるほど盛況でした。また、留学生による太極拳と剣を使った太極拳も披露され、参加者の注目を集めていました。

今年4月に、留学生の教育指導及び日本語教育、さらには、留学生交流の推進、国際交流事業の推進等に寄与することを目的に本学に留学生センターが設置されました。同時に留学生課と国際企画課が設置され本学の国際化が画期的に進展することとなりました。受入留学生数も2001年度200名が、2002年度5月240名、同10月280名と飛躍的に増加し、来年度は確実に300名を超えようとしています。全国の留学生受入数も現在95,550名と「留学生10万人受入れ計画」をほぼ達成しようとしています。

本学では、留学生の増加に伴う受入れ側の態勢が追いつかず、特に宿舎問題等課題は山積しています。また、日本人学生の異文化体験・国際意識を高めるため、派遣留学を増やすことも必要になってきています。そのためにも、山口大学でのより一層の国際交流部門の整備が望まれるところです。

この留学生懇談会で国際交流の意識が高まり、外国人留学生の受入れ及び日本人学生の海外への留学拡大を一層推進し、より日本を理解してもらう一方、また、我々日本人の外国人に対する理解を深めていくことへの一端になれば幸いです。

E-mail:GA142@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

海外研修を終えて

アメリカ滞在記　～モンタナ編Ⅲ～

■中村　浩子　総務部国際企画課国際交流係

Professional Langugage Developmentの授業風景（右端が筆者）

秋期研修

秋からは、研修の内容も少し変わり、語学学校の授業の代わりに、Colloquiumという、米国の高等教育について学ぶゼミのような授業と、Professional Language DevelopmentいうBusiness英語のようなクラスが始まりました。Colloquiumでは、MSUのスタッフや、MSU以外の州立大学からのゲストスピーカーから、各々の大学の、現状、問題点等についての講義を受けました。

米国では、連邦政府の教育への関与が非常に少なく、逆に州政府の権限が大きいため、日本のtop down方式とはまるで逆のbottom up方式での決定方法が取られています。州立大学の職員からなるNPO団体の活動が盛んで、そういう団体が政策等を決定して、議員に働きかけて、関連法案の作成、提出あるいは却下に影響を及ぼしているということでした。

9月11日の同時多発テロが起こった際も、州立大学間で活発な情報交換・意見交換がなされ迅速な対応が取られていましたが、これが日本で起こった場合は国立大学やはり政府の決定を待つしか方法がないのかもしれません。Professional Language DevelopmentではBusiness Letterの書き方、また、Business関連のイディオム等を学んだり、地域の人々との交流のため、ボランティア活動を行ったりしました。

ボランティアは、自ら募集団体を探し、コンタクトを取り、勤務時間等の折衝を行うことから始めましたが、アメリカでは日本に比べ、さまざまな年代の人がが当然のように社会活動の一環としてボランティアを行っていました。また、このクラスにおける、1番大きなプロジェクトは、12月にモンタナを発つ前に行った地域の人々対象の日本の紹介のプレゼンテーションでした。

テーマはJapanese artということで、書道、華道、茶道、歌舞伎等々、皆で分担を決め、日本の紹介をしました。私は、日本のアニメーションについて紹介しましたが、アニメは、アメリカでは、「ジャパニメーション」と言われるほど、人気で、本屋でも、英訳された日本の漫画本を見かけたりしました。

TOPICS

ワシントンD.C.視察

ワシントンD.C.出張の際に撮ったホワイトハウス

秋期研修の一環で、10月にワシントンD.C.に行き、連邦教育省、教育NPO(カルコン、州立大学協会など)を訪問しました。Colloquiumで学んだ通り、日本の文部科学省のカウンターパートである連邦教育省は、国家の教育政策を指導するわけではなく、奨学金の給付、教育機関への補助金の給付等を主な事業としていること、それに反して、教育NPOの活動が非常に盛んであることを改めて認識しました。

中でも興味深かったのは、Council for Highter Education Accreditationというaccredit（認定）を行う団体で、米国においてはこういったNPO団体が、卒業後の就職率、各機関の歴史等を評価基準として認定を行い、高等教育の質の保証と、質の改善に努めていました。認定を受けているかどうかは、当然、学生が大学を選ぶ際の判断基準になりますし、例えば、司法試験を受ける際にも認定を受けたLaw Schoolの修了が要件となっています。

Colloquiumで講義をしてくれた
北イリノイ大学のディレクターと

NAFSA地域会合

11月にCalifornia州のPalm Springsにて行われたNAFSA会議に参加の機会を与えていただきました。NAFSAとはNational Association of Foreign Student Advisorの略で、州立大学で国際交流を担当している職員からなるNPO団体です。毎年会合の機会を設け、留学生・外国人研究者の受入れ・サービス、逆に、アメリカ人学生の海外への派遣等に関連したさまざまなセッションを開き、国際交流に関する意見・情報交換を行っています。

事務職員という枠に収まらない州立大学の職員は、時には、Academic Professionalという言い方をされるようですが、かなりの専門知識を備えている方々が多く、どのセッションも学ぶべきところは多かったです。留学生へのオリエンテーションプログラム、カルチャーショックへの対処の方法、学内寮の国際交流の取り組み等々、ぜひとも日本でも取り入れてみたい制度、サービスが多々紹介されていました。

なお、NAFSAの概要はwebに掲載されています。興味のある方は１度訪れてみてはいかがでしょうか。
http://www.nafsa.org

次回はオレゴン州立大学でのインターンシップについて紹介します。

プレゼンテーションの後にみんなで一緒に

TOPICS

平成14年度山口大学英会話（上級・海外）研修受講報告

リジャイナ大学（カナダ）短期集中語学講座を受講して

■鳥谷　和世　附属図書館工学部分館情報サービス係

2002年8月、私は山口大学英会話（上級・海外）研修受講者として約1カ月間、カナダでの語学学習プログラムに参加させていただきました。その内容を今回ご紹介しようと思います。

私が参加したのはリジャイナ大学ESLセンターが提供する日本人学生向けの英語学習短期プログラムです。大学のあるリジャイナ市はカナダ平原地帯に位置するサスカチュワン州の首都であり、100年あまりの歴史を有する人口およそ19万人の静かな都市です。このプログラムについては前号にも一緒に参加した片山さんがレポートを書かれていますので、私はテーマを絞ってリジャイナ滞在中に私が出会った人達のことを取り上げようと思います。

わずか4週間の短いプログラムでしたが、私にとってもっとも印象的だったのはこのプログラムを支えるさまざまな人々との出会いだったからであり、またプログラムの雰囲気もこれによって感じ取っていただけるのではないかと思うからです。

インストラクター　サンディ

最初に紹介したいのは、私のクラスを担当してくれたインストラクターのサンディです。彼女は50代後半のとてもおしゃれな女性で、教師をしている娘さんとカウボーイの息子さんがあり、ご主人はカナダ王室騎馬警察（RCMP）に勤務しているそうです。彼女の民族的な背景はイギリスだということですが、彼女自身はアフリカで生まれ、カナダで大学教育をうけた後、ジンバブエで教師をしていたこともあるそうです。

サンディは「人種・文化のMelting Pot」としてのカナダにとても誇りをもっている人でした。このプログラムの目的が英語によるコミュニケーション能力の向上にあるのは勿論ですが、同時にカナダの文化や社会を紹介するというテーマもあり、折に触れて感じる彼女の姿勢そのものがカナダの多文化主義や先住民族の文化を学ぶ際の大きなメッセージになっていたように思います。サンディは私の感覚では戸惑いを感じるほど学生への愛情を率直に表現する人で（若いほかの学生は少しも戸惑ってなかったようですが）、そのためもあってかクラスの雰囲気は最後までとてもよく、日本語を禁じられた4週間、モチベーションを下げることなく授業に参加することができました。

インストラクターのサンディと
（Graduation Ceremonyにて）

CPたち

このプログラムの特徴の一つに、主にリジャイナ大学の学生からなるCP（カンバセーション・パートナー）の存在があります。彼らはプログラムを通じて4名の学生を担当してCPセッション（日本人学生2人にCP1人がつき、約1時間、会話練習や個別の発音練習を行います）を行うほか、各種アクティビティをサポートします。移動のバスの中でも彼らが音頭をとって歌を歌ったりゲームをしたりと雰囲気を盛り上げてくれました。

リーダー格のライアン、ムードメーカーのティム、しっかり者のダヴァン、個性派のネリー、キュートなアマンダ等々、私たちのプログラムをサポートしてくれたのは10名ほどのCPたちですが、大半が日本人学生と殆ど変わらない年齢で

TOPICS

あるにも関わらず（なかには19歳というCPもいました）常に積極的に私たちをサポートしてくれて、終始和気藹々とした雰囲気のなかで過ごすことができました。

私を担当してくれたCPのアマンダ、CPセッションで一緒だったマイと（Graduation Ceremonyにて）

ホスト・ファーザーのイアン、マザーのジルそして私（家のキッチンで）

ホストファミリー

忘れてならないのはホスト・ファミリーです。平日の夜は勿論、週末を一緒にすごす彼らとの時間はプログラムのなかでもとても重要な部分をしめています。私を受け入れてくれたのはともに英国ノッティンガム出身の50代後半のカップルでした。学生を受け入れるようになってから7年という彼らは学生の受け入れには慣れている印象で、必要な時にはキャンパスへの送迎などこころよくサポートしてくれます。また普段の生活でも積極的に話しかけてくれるなど、私が英語を学びにきているということをよく理解してくれて、日常生活からそれをサポートするよう心がけてくれました。

ホームスティ・ファミリーとの生活はやはり家庭によって事情は異なるようで一概に言うことはできません。ただ私のホスト・マザーのジルは仕事をもたずに家庭にいるためかとても面倒見がよく、また家事にも熱心な人だったので家はいつも清潔で快適、夕食も毎回暖かくておいしい食事をだしてもらい、生活の面で不自由を感じることは殆どありませんでした。ご主人のイアンもとてもフレンドリーな方で夫婦仲もよく、リジャイナ市内にそれぞれの恋人と暮らす二人の子どもさん、車で約1時間ほどの距離にあるムース・ジョーで暮らすイアンのお母さん、それぞれに行き来は頻繁で、とてもよい家族だったと思います。

リジャイナ大学図書館のライブラリアン

プログラムとは別になりますが、私たちは業務研修として関連部署へジョブインタビューを行う機会がありました。私はリジャイナ大学図書館ライブラリアンのSgrazzutti氏とMcKenna氏にお会いしてお話を伺うことができましたが、2人とも親切で気さくな方で、細かい質問にまで丁寧に応対してくれました。

リジャイナ大学図書館には72名の方が働いており、そのうちライブラリアンは20名だということです。個々に専門分野をもつ彼らは各々それに関連する学部を担当し、その規模に応じてスタッフを抱えるということで、同じ図書館とはいえ日本とはかなりの違いがありますが、大学図書館の機能として最も重要なのは学部との連携だという指摘など、ベースにあるものは日本と同じだと改めて感じました。わずか1時間あまりの短い時間でしたが、有意義なインタビューを行うことができたと考えています。

最後に

これまで紹介してきた人以外にもコーディネーターの永井さんなどすばらしい方々と巡り会えた4週間でした。1カ月に満たない滞在とはいえ、外国人の学生として暮らすというのはキャンパスの内外を問わず戸惑うことも多かったのですが、リジャイナではどんな時にもサポートしてくれる誰かがいてくれます。英語を学ぶという自分のモチベーションが高ければ高いほど、得るものも多いところだと思います。私もこのプログラムに参加できたことをよい機会に、Second Languageとして英語を使いこなせる日を目指してこれからも勉強を続けていこうと考えています。

最後に、カナダでの英語研修というすばらしい機会を与えて下さったことに感謝しつつ筆をおきたいと思います。もし英語を勉強したいと考えている方があれば、是非、参加されることをおすすめします。海外での研修はすばらしい思い出とともに、もっと英語を学んでいこうという大きなモチベーションも与えてくれることと思います。本当にありがとうございました。

☎0836（85）9051
E-mail:toya@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

講演会報告 人文学異文化交流研究施設主催

厳しい自然が育んだ豊かな文化 ～アイスランド～

■ 矢儀乃倫子　人文科学研究科博士課程

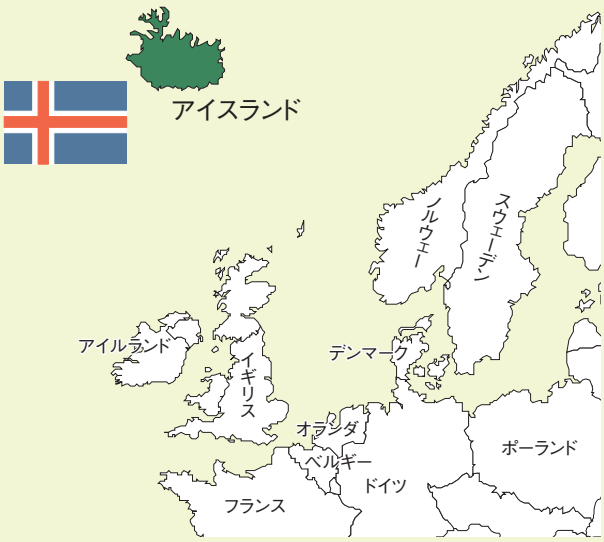
アイスランド。その国名を聞いて、一番始めに思い浮かべるのはどのような風景だろうか？一面に広がる雪と氷、生活が困難なほどの寒さ、私同様、そう想像される方がほとんどだろう。そして、実際それはある程度当っている。北極圏に近い北大西洋上にあるアイスランドは、暖流の影響を受けるとはいえ、人が住むには厳しい環境である。

そのような中で人々はずっと昔から独自の豊かな文化を育んできたのである。10月18日、現在アイスランド大使館で参事官をされているラグナル・バルドルソン氏をお招きし、「アイスランドの歴史と文化」と題する講演会が開かれた。ラグナル氏のお話しは、私たちが一方的に抱きがちな先入観を覆すに十分魅力的で興味深いものであった。

厳しい自然が育んだ豊かな文化～サガを中心に～

今回、ラグナル氏はアイスランド建国の歴史を中心に、自然環境とそこから生まれた文化についてお話ししてくださった。アイスランドに最初の定住者がやってきたのは874年、ノルウェーのヴァイキングであった。それ以前にも定住を試みた者があったが、厳しい冬に耐えきれず、去っていってしまった。その時アイスランドという名がつけられたそうだ。

ヴァイキングは家畜の飼育、漁業、農業等をして生活し、夏には船でヨーロッパ諸国と貿易もしたが、冬にはほとんど野外活動ができなかった。そこで自然と屋内での生活が多くなったのだが、そこから素晴らしい文化が生まれた。彼らは自分の母国の伝説や歴史を語り合い、後にそれをもとに物語を作り、文字で書き記したのだ。サガ（アイスランド初期の英雄物語）の誕生である。事実に基づいて作られているサガには、娯楽として楽しむだけでなく、歴史を残すという効果もあり、



アイスランドの全国土面積は103,000平方キロメートルで、南北の最長距離は約306km、東西は約483kmである。フィヨルドと入江部分を含む沿岸線はおよそ5,960kmの長さに及ぶ。沿岸沿いには無数の島々が点在し、幾つかの島々には人々が居住しており、その代表的な島が火山で有名な人口5千人のウエストマン諸島のヘイマエイ、人が住む最北の島は北極圏真下に位置する人口約100人のグリムスエイ。

TOPICS

当時の歴史を研究する際に大変役立つそうだ。さらに驚いたことに、サガを書き記した言葉はヴァイキングがやって来た当時のまま、ほとんど変わっていない。その原因としては、アイスランドが他の国から遠く離れているために、影響を受けにくかったということがあげられる。寒い冬を過ごす中でサガが生まれ、他の国からの孤立という地理的条件がアイスランド語をそのまま保存した。まさに、厳しい自然があったからこそ豊かな文化が育まれたといえる。

アイスランド語に大きな誇り

アイスランドの人々はサガをとても大切にしているが、自分たちの母語であるアイスランド語にも大きな誇りと自信を持っている。その不変性は独立国たるアイスランドの根本なのだ。そのため、ラグナル氏は言葉の問題を真剣に考えておられた。

実は講演の前日にお会いする機会があったのだが、その時の話題も言葉の問題であった。経済や環境の問題を話し合うため、国境を越え、異なった言語を母語とする多くの人々が集う現在、どうコミュニケーションをとるかは重要な問題だ。ラグナル氏は「言葉にはそれを話す国の力が大きく関係している」というようなことをおっしゃり、印象的であった。私は自分の母語を大事にしているか、ふと考えさせられた。

「アイスランドの歴史と文化」を話すラグナル氏

「未知なる国」から身近な国へ

講演の初め、ラグナル氏は日本にとってアイスランドはまだまだ「未知なる国」だとおっしゃった。しかし、講演が終わりに近づく頃、アイスランドはもう身近な国になっていた。実際、アイスランドと日本には共通点も多い。島国であること、火山国であること、そして捕鯨問題…。

講演後には、軍隊の有無や宗教、国土の成り立ちなどについて参加者の間から盛んに質問が挙げられた。皆さん多いに興味をもたれたようであった。2時間余りの短い間ではあったが、異文化に触れ自分の世界がまた大きく広がった、そんな有意義な時間であった。

講演を聴く参加者たち

TOPICS

サタデー・カレッジ

KIEN VI IRAS?

あなたはどこへ行こうとしているのですか？

■大谷　泰子　人文学部社会情報論コース 2001年卒業

2002年前期のサタデー・カレッジの現代文化コースは「エスペラントの文化と思想」であった。講師の山本先生はコメンツァント（初心者）、受講者十数人の中にもエスペラントのできる者は1人もいないという状況の中で、『Paroladoj de D-ro L.L. Zamenhof』をテキストに講義が始まった。このテキストは、エスペラントの創始者ザメンホフの演説集で、もちろん全文エスペラントである。

先生は毎回、多量の資料を作って来られた。それを使って、発音と文法を教えながら、日本語に訳し、かつザメンホフの思想－ホマラニスモ（人類人主義）－を理解させるという内容であった。

心地よい充実感

初回の講義は、いきなりテキストの本文から始まった。1905年8月5日、フランスのブローニュで第1回世界エスペラント大会が開かれた時の演説である。全8回中、6回目はエスペラントを聞くために東京から2人の講師（臼井裕之さんと木村護郎さん）が招かれた。講師は一言も日本語を使わず、黒板に地図を書いたり、身振りや手振りでザメンホフがエスペラントを作った経緯を話された。

実は、この時は講義の内容が前もって配られていたから、講師の伝えたい事はわかっていた。だから、エスペラントはほとんどわからなかったが、生の言葉が聞けたのは勉強になった。また同じ時に、2人の少し違う話し方が聞けたのは面白かった。最後の2回は、有志が分担して訳してきて発表した。

このように、どの回も内容がぎっしり詰まっていて一瞬も気が抜けなかった。だから、1時間半の講義が終わった時にはぐったりするほど疲れた。しかし、心地好い充実感があった。

エスペラントって何だろう

先に、受講者は誰もエスペラントができないと書いた。しかし、実は私は30数年前に少し勉強した事がある。その頃、私は夜間高校生だった。ある日、『エスペラント講習会参加者募集』というポスターを見た。「エスペラントって何だろう」と興味を持ったから行ってみた。そこで、ポーランドの眼科医・ザメンホフが共通の言語になることを願った作った人工語であること、発音も文法もやさしく、例外がないことなどを知った。ちょうど夏で、学校が休みだったから参加することにした。講習が終わってからも少し勉強会に出たが、学校が始まったり、仕事が忙しかったりでいつか止めてしまった。それから、30数年の間に、時々思い出してテキストを開いたことがあったが、いつも長続きしなかった。

臼井裕之特別講師のエスペラント講義

TOPICS

必要とされる言葉

その内、英語が世界の共通語のようになった。小学校から英語教育をすべきだとか、英語を第2公用語にしようという話まで出てきた。そういうことを聞きながら、私はもうエスペラントが必要とされた時代は終わったのだと思った。

しかし、サタデー・カレッジで再び勉強を始めて、エスペラントはまだ生きており、これからも必要とされる言語であると感じた。今も習い始める人がたくさんいること、世界中で多くの本が出版され、昔からある雑誌は今も定期的に出版されていること、英語はできるが、できることなら使いたくないといってエスペラントを話すヨーロッパの人がいることなどを知った。また、EUでは英語を使うことは、民主主義ではないという理由で共通語を欲しがっていると新聞で読んだのは、つい最近のことである。

さて、東京から講師が来られた日、講義が終わってから、私は用があったのでは3階に上がった。そこで、キョロキョロしながら廊下を歩いておられる臼井さんを見つけた。とっさに、「Kien vl iras？」と声をかけた。それから、「Ĉu necesejo？」と言った。臼井さんは、「そうです。」と答えられた。人文棟は偶数階に男子トイレがある。それで、「トイレはこの上か下の階で、階段のすぐ横です。」と教えた。こう言う位の単語は私の頭の中の辞書にありそうだった。しかし、組み立てるには時間がかかると判断したから、日本語で言った。生理現象は時として急を要する。その日の臼井さんは1時間半、クーラーのきいた部屋で頭と体をフル稼働されたのを知っていたから。

身振り手振りで単語の説明をする木村護郎特別講師

厚い本と格闘

サタデー・カレッジ終了後、講義を受けて興味を持ったその時のメンバー7人が、週1回集まって引き続き勉強をしている。これまでに旧ユーゴスラヴィアの作家の旅行記を読み、今は、ザメンホフについて書いてある厚い本と格闘しているところである。

表題の『KIEN VI IRAS？』は、私が初めて実際に使った記念すべきエスペラントである。意味は「あなたはどこへ行こうとしているのですか。」で、「Ĉu ne cesejo？」は「トイレですか。」である。

生の言葉を学ぶ受講生（左から3人目が筆者）

TOPICS

コーヒーアワー

学長コーヒーアワーはじまる！（近況報告）
～学長と気軽に話をする時間～

学長に大会成績を報告するボート部の学生

「どんな道を選ぶのですか」学生と楽しく歓談

加藤紘学長が、学生や教職員の生の声を聞くことを目的に、山口市の吉田キャンパスにある学長応接室で「コーヒーアワー」を開設しました。

指定された昼休みに、希望者と学長が一緒に食事を摂りながら、また、コーヒーを楽しみながら気軽に接して、勉学や研究のこと、学生生活のこと、職場環境のことなど本学に関するあらゆることを意見交換します。

初回は工学部教官

初回は10月24日に工学部の教官が訪問され、学長は訪問者とコーヒーを飲みながら、研究や研究費の実態に耳を傾けました。最初は硬い表情だった訪問者も会話するうちにすっかりうち解けて、「研究者として話が合い、面白かった」と満足されていました。

現在（1月中旬）では、すでに11組の訪問者（40名近い学生・教職員）と意見交換を行っています。その中では、学部を超えた就職に関する情報提供への要望（学生）や萌芽的研究への支援について（教官）、あるいは学内情報の共有化（事務官）など、その内容は様々です。学長には学生・教職員が日頃思っていること、感じていることが伝わって、学長と諸現場とのコミュニケーションの円滑化に繋がるのではないでしょうか。

積極的な意見交換

廣中平祐前学長も、「学長とだべる会」で学生と積極的に意見交換されていましたが、教職員まで対象を広げるのは歴代学長で初めてです。

本学への要望、改善したいことを学長と直接話せるこの制度により、学生・教職員の悩みや不満の早期解消、ひいては大学全体の環境改善・向上が期待されます。

申し込み要領は右の「お知らせ」のとおりです。お気軽にお申し込みください。

なお、現在は学内者対象ですが、学長は将来的には地域社会の方々との意見交換も考えています。

（文責：総務部総務課広報室　有吉義和）

TOPICS

お　知　ら　せ

「コーヒーアワー」の開催について

本学の学生・教職員の方々から、勉学及び学生生活に関すること並びに教育・研究及び職場環境に関すること等について、お話しを伺いたいと思っております。

ついては、下記の要領により、「コーヒーアワー」を開設することとしましたので、気軽な気持ちでお越しください。

お待ちしています。

《コーヒーアワー　～学長と気軽に話をする時間～》

1. 日　　時：原則として毎月第2・4木曜日
　　時間は、12時15分から13時まで
2. 場　　所：学長応接室（事務局1号館3階）
3. 対　象　者：本学の学生及び教職員
4. 申し込み等：「コーヒーアワー」の希望者は、希望日の1週間前までに総務課秘書室へ電話（083-933-5014）、メール（SH017（ゼロイチナナ）@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp）又は直接申し込みください。
なお、希望者が多数の場合、秘書室において日程調整をさせていただく場合があります。
（当日は、学生証をご持参くださるようお願いいたします。）

TOPICS

高大連携

2002山口大学高大連携セミナー開催

■大久保　敦　アドミッションセンター助教授

平成14年11月30日㈯山口市のニューメディアプラザ山口において本学アドミッションセンター、大学教育センターおよび入試検討専門員会が共催（山口県および山口県教育委員会後援）で、2002山口大学高大連携セミナー「高大連携の現状と課題」を開催いたしましたので報告いたします。

近年、高校生が大学の講義を受たり、あるいは大学教官が高校へ出向いて講義などを行うなど、いわゆる高大連携の事業が全国的に広まりつつあります。山口大学においても各学部や学科などの単位でこのような活動が行われています。また、平成14年度から山口県においても高大連携教育実践モデル事業のプロジェクトが始まり、山口大学も含めた県内の各大学・短大がその構想に加えられています。このように現実ばかりが先行していくなか、全国的な状況もさることと山口大学の学内の全体像さえ誰もつかめていないというのが実状でした。

また、高大連携とは言ってもそのとらえ方は実にさまざまです。そこで、本セミナーは高大連携に関して県内の高校、大学および教育関係者を対象として、①現状の把握、②問題点の共有化、③円滑な高大接続を目指して、高大連携を考える動機付けとするという三点をねらいとして企画いたしました。当日は近県も含め大学、高校をはじめとする教育関係者85名の方のご参加をいただきました。

あいさつする丸本副学長

講演会

第一部の講演会では高大連携に関する全国調査（平成12年度）に携わられた、メディア教育開発センター教授小野博先生および大学入試センター助教授鈴木規夫先生をお招きし、高大連携の全国的な状況、問題点、課題、あるいは米国における高大連携・接続の状況やそこから得られるヒントなどをご紹介いただきました。

公開討論会

第二部の公開討論会では、まず本学大学教育センター吉田香奈講師より高大連携について山口大学の現状、山口県教育庁教職員課高校改革推進班中村彰利主事より県内の現状および高大連携教育実践モデル事業の紹介、山口県立美祢高等学校尾崎明弘教諭より高校現場の具体事例、および筆者よりAO入試の視点から捉えた高大の連携と接続の問題について、それぞれの立場を代表して話題提供がなされました。

これに続いて講演会のお二人の講師にも加わっていただき討論会がなされました。壇上の発言以外にも会場より、大学側から3名および高等学校側から4名の発言が加わり、予定された時間が足らなくなるほどでした。

最後のまとめでは、鈴木規夫先生からは「従来は生徒の考え方は大学を決めてから学部を決めるという序列化の時代だったが、ここ数年、学部・

TOPICS

専門を決めてから大学を決めるという意識の変化が見られるようになってきた。これをバックアップする意味で高大連携はかなり大きな力になる。その点では大いにその部分を進めていく必要があると考えている」、一方小野博先生からは「大学のことをよく知るという意味での高大連携は非常に上手くいっている。今後は基礎学力のことが問題になるであろう。そのような意味でプレイスメントテストの開発と普及をすすめている」との助言をいただいた。

高校教育から大学教育への円滑な接続は教育の重要な課題の一つです。また、この円滑な接続を実現するためには高校と大学の連携は必要不可欠なことです。本セミナーがその一助となり得れば幸いです。なお、詳細については現在報告書を編纂中です。発行後ご参照いただければと思います。

「大学選びに意識の変化が現れるようになった」と話し合う公開討論会

プログラム

開　　会（13:00開始）

総合司会：三浦　房紀（山口大学アドミッションセンター）

開会の挨拶　丸本　卓哉（山口大学副学長）

講　　演（13:05-14:25）

鈴木　規夫（大学入試センター助教授）「高大連携の取組みの現状と課題」

小野　　博（メディア教育開発センター教授）「米国の高大連携、AP（Advanced Placement）について」

公開討論会　テーマ「高大連携の現状と課題」（14:40-16:50）

司会：堀江　穆（山口大学アドミッションセンター教授）

コメンテーター：小野　博、鈴木規夫

話題提供者：吉田　香奈（山口大学大学教育センター講師）
「山口大学の教育と高大連携の現状」

中村　彰利（山口県教育庁教職員課高校改革推進班管理主事）
「山口県における高大連携教育の推進」

尾崎　明弘（山口県立美祢高等学校教諭）
「高校現場からみた高大連携－理数科における高大連携－」

大久保　敦（山口大学アドミッションセンター助教授）
「AO入試からみた高大の接続と連携」

閉　　会（17:00終了）

閉会の挨拶　平野　充好（山口大学副学長）

私の授業

昆虫学は面白い

竹松葉子
助教授
農学部　生物資源環境科学科

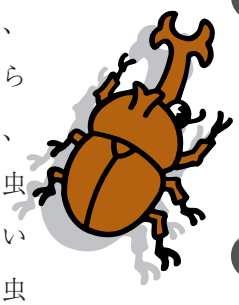
昆虫は面白い

私の専門は「昆虫学」です。テレビ等で昆虫のおもしろ生態を特集したり、クイズ番組にしたりしますよね。あのテレビの画面でしか見ることのできない面白さ楽しさを目で見て触って実感できるのが昆虫学の醍醐味だと思います。

昆虫は、とても興味深い動物です。それは、人間が誕生するよりはるか昔からこの地球上にすんでおり、あらゆる環境に適応して生き延び、その生活も様々です。種類と数の点で地球上で現在最も繁栄している生き物といわれており、昆虫が生息していないのは、火の中と深い海の中だけではないかとも言われているくらいです。そして、その繁栄の秘密をより深く広く知ってもらうための授業が「昆虫管理学Ｉ」をはじめとする私の担当する授業です。

こんな授業がしたい

自分が学生のころに授業を受けていたときの感覚はいつまでも鮮明に残っています。興味のわく授業ならまじめに受けるが、そうでない授業となると単位のためにはがんばれるけど、さぼったり、授業中は別の事をしたり…。そのせいか、あんなにたくさんの科目を履修してきたのにもかかわらず頭に残っている事がほとんど無いのが今更ながら残念に思います。



そんな昔の自分を反省し、同じ事を繰り返してはならないと思います。授業では、なるべく多くの学生に昆虫のおもしろさを知って貰いたいと考えています。昆虫というものに興味を持って、今まで知らなかった昆虫の事が一つでも記憶に残ってもらえればうれしい限りです。

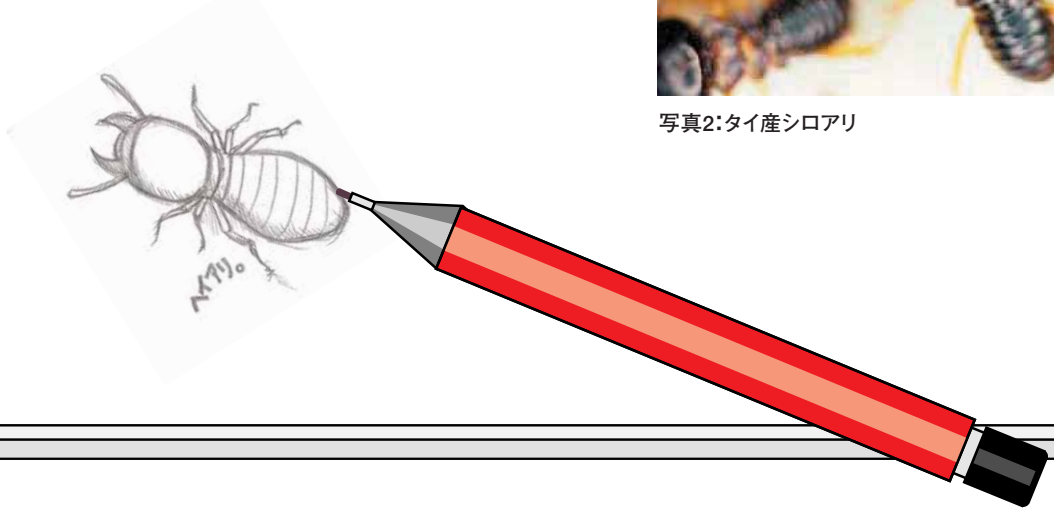
散歩をしたときでも今まで無視していた道ばたの昆虫にふと目を向けてみる機会が増えるようなことがあれば、授業をした甲斐があります。授業の最後のアン

ケートに、「昆虫がこんなに面白いものなんて今まで知らなかった。」「昆虫って奥が深いんですね。」「これからはもっと注意深く周りを見てみます。」というコメントを貰うとうれしいですね。

シロアリも面白い

最後に、昆虫の中でも私が特に専門に研究しているのが住まいの大敵（が、森林の物質循環には重要な役割を果たしている）、シロアリです。シロアリの話はきっと授業中にたくさんするでしょう。シロアリは、アリという名前が付いていますが、アリではなくゴキブリに近いグループです。みなさんはシロアリって話には聞くけど見たこと無いでしょう？

写真1：日本産ヤマトシロアリ



せっかくだから参考までに可愛いシロアリの写真を載せておきます。これがシロアリです（写真1）。そして、シロアリは全部が白いわけではありません。熱帯には黒いシロアリがいるのです！（写真2）

TEL.&FAX:083-933-5838
（E-mail）
takematu@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

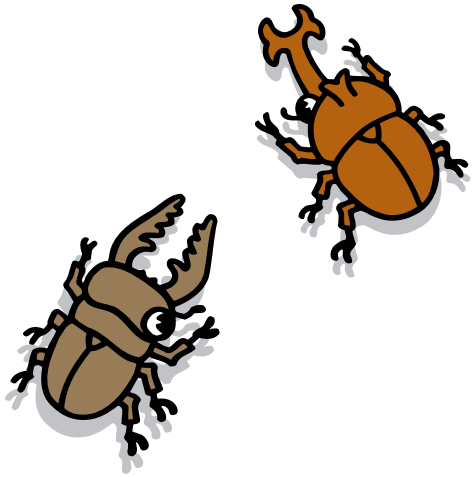


写真2：タイ産シロアリ

私の研究

テーラメイドで分子の鋳型を作る

長岡　勉
教授
工学部　応用化学工学科

分子を区別すること

私たちの住んでいる世界には数え切れないほどの種類の分子が含まれています。それらの性質は一つ一つ異なるため、利用するときには性質の異なる個々の分子を区別する必要があります。このような区別を最も巧妙に行っているのは生物でしょう。生命を維持していくには、食物を消化してタンパクなど体に必要な部品を作っていかねばなりません。このとき、いろいろな分子をちょうどブロックを組み合わせるように合成していくわけですが、どのブロック（分子）を使って目的とするものを作り出すかは非常に難しい作業です。

特に、多くの部品の中から、目的とする部品（分子）を見分ける技術がないとこの合成はうまくいきません。このようにある特定の分子を見分けることを化学では分子認識といいます。分子認識は化学の中心的な技術の一つです。

分子の鋳型で認識すること

このような重要性のため分子認識は古くから研究されており、私の専門とする分析化学でも多くの分子認識技術が開発されてきました。分析化学は、対象とする試料の中にどのような物質がどのくらい含まれているかを調べる学問です。どのような物質が含まれているかを知るためには分子認識を行う必要があります。分子認識を行うための技術は数多く発表されていますが、その中でも比較的新しい概念が分子鋳型という方法です。

この方法では目的とする分子の鋳型をポリマーなどで作り、その分子がそっくり鋳型にはまり込めれば認識できたということになります。正確な鋳型ができていれば、形の違う分子がポリマーの近くにやってきても入り込めず、このポリマーには認識されません。

どのようにして鋳型を作るか

ではいったいどのようにして鋳型を作ればよいのでしょうか。それにはまず目的とする分子を少量ビーカーの中に入れ、その分子を取り囲むようにポリマーを合成して行きます。合成後にその分子をポリマーから取り出せれば鋳型が完成します。このような鋳型ポリマーの作成技術はテーラーメイド法と呼ばれます。

ちょうど仕立て屋さんが客の体に合わせて洋服を作るように、必要な分子に合わせた鋳型ポリマーを作るのです。このような方法では、目的とする分子が変わっても生産設備や方法を変えることなく鋳型ポリマーを作成できます。分子鋳型は概念的に非常にエレガントで、実際多くの研究者がこのような手順で鋳型を作る技術を考えてきました。

しかし精密な鋳型の作成に成功した例は、実際にはほとんどありません。これは鋳型となるポリマーも現実には連続体でなく分子からできているためで、分子の形を精密にトレースする

ような正確な鋳型表面ができなかったためと思われます。

導電性ポリマーを用いる新しい試み

このような問題を抱えた分子鋳型法ですが、私たちのグループは導電性ポリマーを鋳型ポリマーとして選択することでこの問題点を解決しました。導電性ポリマーは文字通り電気を通すことができるポリマーで、私たちはこの中でもポリピロールを選びました。図にこのポリマーを使ってアミノ酸の光学異性体認識を行う例を示します。ポリピロールなどの導電性ポリマーは合成時にドーパントと呼ばれる陰イオンを取り込みますが、これを私たちは鋳型を作る分子（テンプレート）として利用しています。導電性ポリマーではこのドーパントの取り込みがポリマーを合成する際に自動的かつある決まった割合でおこるため、合成した鋳型ポリマーの評価がこれまでの方法に比べて確実に行えるのです。また、私たちは合成したポリマーをコロイドと呼ばれるナノサイズの粒子で得ることに成功したため、分子の取り込み速度が非常に速く、今までのように実験の結果がわかるまで1日単位で待たなければならないということもなくなりました。このように実験を確実かつ効率よく進めることができるようになったこともあって、非常に認識効率のよいポリマーを数多く開発できました。

今後の研究

今後も分子認識の研究を積極的に行いたいと考えていますが、これからは開発したポリマーをセンサーなどに積極的に活用したいと思っています。現在、コレステロールを測定できるセンサーを開発中で、何とか市販できるものに仕上げたいと考えているところです。

TEL:0836-85-9222
（E-mail）
nagaoka@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

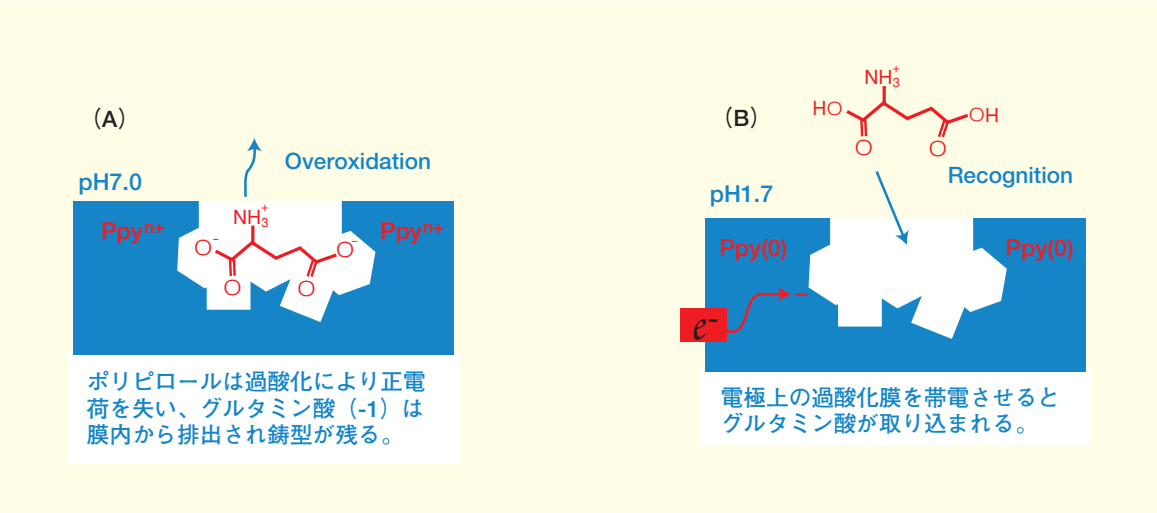


図　ポリピロールによる分子鋳型の作成

私の研究

ロシア・ソヴィエト音楽：ショスタコーヴィチの研究

RGALIの入館証

安原　雅之
助教授
教育学部

ショスタコーヴィチの研究

「私は音楽学者です」と言って、直ぐに私が何をやっているかを理解してくれる人はいないはずです。音楽学とは、音楽に関するあらゆる学問的研究を含むものですが、その対象となる音楽も西洋音楽から日本音楽、あるいは世界の民族音楽までさまざまであり、また研究方法も、楽譜の分析や文献による研究の他、音楽社会学、民族音楽学、音楽記号学等々、非常に多岐に渡っています。ですから、「専門は音楽学」と言っただけでは、いったい私が何を研究しているのかわからないのです。

私の場合、音楽学の中でも西洋音楽史、その中でも特にロシア・ソヴィエト音楽を専門的に研究しており、現在は、20世紀を代表する作曲家のひとりであるドミートリイ・ショスタコーヴィチ（1906―1975）についての論文をまとめています。

ショスタコーヴィチは、15の交響曲、15の弦楽四重奏曲をはじめとするさまざまな室内楽曲、さらにオペラや映画音楽など、数多くの名作を残した作曲家です。今でこそ、ロシアにおいてもショスタコーヴィチは偉大な作曲家であると認められていますが、ソ連時代には必ずしもそうでないこともありました。スターリンの時代には、粛正こそ免れたものの、当局の弾圧を受けた時代もありました。特に、1936年には彼のオペラ《ムツェンスク郡のマクベス夫人》が党の機関紙『プラウダ』によってこき下ろされ、また1948年には政治家ジダーノフによって「人民の敵」と非難されていますが、この2つの批判は彼の作曲活動にも大きな影響を与えるものでした。

旧ソ連の音楽を研究する場合、音楽に対する政治やイデオロギーの影響が非常に重要な問題となります。ショスタコーヴィチの場合も例外ではなく、今私は、1936年に『プラウダ』が掲載したショスタコーヴィチ批判と、それが彼の創作に与えた影響について研究を進めています。

アーカイヴでの調査

私がはじめてロシア（旧ソ連）に行ったのは、まだ大学3年の夏でした。以来、この国には何度も行っていますが、旅行以外では2度長期に滞在して研究を行いました。最近では、2000年の年末から約半年の間、日露青年交流センター（外務省）の助成金を得てモスクワに滞在しました。所属はモスクワ音楽院でしたが、実際には、モスクワの中心からちょっと離れたところにある「文学・芸術に関するロシア国立文献保管所」（通称RGALI）に通い、文献の調査を行いました。

このアーカイヴには、ロシア及び旧ソ連の文

学・芸術関係の膨大な資料が保管されていますが、その量と、それらがシステマティックに整理されていることには驚くばかりです。これほどの資料が集まったのは、旧ソ連が社会主義国であり、芸術家個人の遺産も国家の遺産であると見なされたからでしょう。多くの資料は、当事者の死後に遺族によって寄贈されていますが、中には芸術家の生前から寄贈されたものもあります。私は、自筆の原稿ばかりでなく、会議の議事録や個人のメモ帳などさまざまな資料のページをめくるたびに、それぞれの時代の空気が蘇るような気がしました。私はまた、膨大な資料を几帳面に整理した人たちに思いを馳せずにはいられませんでした。言論の自由はなく、資料を客観的に評価することが許されなかった旧ソ連当時、彼らはとにかく資料をそのまま保管し、後生の研究者のために残してくれたように思えてなりませんでした。

アーカイヴの中では、独特の時間が流れています。そこは、外観も設備も古めかしい感じです。静まりかえった閲覧室では、多くの研究者たちがひたすら資料をめくり、ノートを取っています。コピーは難しく、必要な資料は自分で書き写すのが基本なのです。

コンピュータの活用

今回の私の調査では、1930年代のショスタコーヴィチに関わるさまざまな資料を閲覧しました。閲覧した資料は、自筆の手紙やノートから新聞の切り抜き、あるいは会議の議事録まで、多岐に渡っていました。資料の多くはマイクロフィルム化されていましたが、ややピンぼけのスクリーンを見続けるのは決して楽な作業ではありませんでした。最近ではノートパソコンを持ち込むことが許されており、最初はひたすら手書きでノートを取っていた私も、途中からコンピュータを使うようになりました。最初からコンピュータを使わなかったのは、ちょうど冬だったので歩道が凍結して滑って転ぶこともあり、コンピュータを持ち運ぶのが危険だったからでした。私の入館証の上部には「コンピュータの使用を許可します」と手書きで書かれています。これも、最先端のコンピュータとレトロな設備のギャップを象徴するようで、改めて見るとちょっと可笑しいです。

モスクワでの生活

さて、アーカイヴは5時には閉館になります。まずは、地下鉄に乗って帰宅するわけですが、私が滞在していた音楽院のゲストハウスは、音楽院の真裏にあり、クレムリンや赤の広場から徒歩3分というモスクワの中でも中心の中心でした。モスクワで最も重要なコンサート会場である音楽院のホールは言うまでもなく、ボリショイ劇場やその他の劇場や音楽会場にもほとんど徒歩で行けるという恵まれた環境でした。帰宅してひと休みし、夕飯を済ませてから毎日のようにコンサートに出かけました。日本や欧米ではほとんどお客が入らないような現代音楽のコンサートも、モスクワではいつも人が集まり皆熱心に聞き入っていたことが特に印象に残りました。思い出話は尽きませんが、詳しくは私の研究室のホームページに掲載している「モスクワ通信」をご覧ください。

http://www.yasuhara.edu.yamaguchi-u.ac.jp/

教官著作書の紹介

「第2版無機化学概論」

（丸善株式会社　2002年2月15日）

無機化学は有機化学に比べて、ともすれば系統化と規則化に欠け、多くの事実の集積から成っているという嫌いがあります。これは無機化学のもつ物性と反応性の複雑さ、多様性の故です。周期律表中の同族元素の化合物においても、その物理的、化学的性質が同族の延長上とは考えられないほど異なるものがあります。そのため、無機化学を初めて学ぶ学生諸君はとまどいを憶え、退屈で魅力の少ないものに感じるかも知れません。

学習段階においては、系統化と規則化がしばしば化学の理解に役立つことも事実です。しかし、無機化学の分野の研究に携わっている人々にとって、その複雑さ、多様性あるいは意外性は研究対象としての魅力を高める好材料です。1987年度のノーベル物理学賞の対象になった銅-ランタン-バリウム混合酸化物から成る高温超伝導体はまさに無機化合物のもつ意外性です。本書は、学生諸君が退屈な無機化学の段階をなるべく早い時期に通り抜け、魅力的で創造的な無機化学の分野に進んでほしいという願いをこめて執筆したものです。

小倉興太郎　教授　工学部応用化学工学科精密応用化学大講座
TEL:0836-85-9221　E-mail:ogura@yamaguchi-u.ac.jp

「飢饉の理論」　スティーブン・デブロー著（松井範惇訳）

（東洋経済新報社　1999年11月）

飢餓・飢饉に対して、国連やNGO,各国の援助や対策がなされてきました。それでもなお、地球上から飢餓はなくならず、飢えに苦しむ人々が多くいます。

本書は、飢饉がなぜ起きるのか、そしてなぜ解決が難しいのか、これまで提示されてきた飢饉の理論および実証研究を再検討し、批判的に整理し直しています。「深刻な飢えの原因は、過剰人口、悪天候や借金ではなく、政府の政策」にあり、援助が貧しい人々に届かず、支配者や権力者の手にわたっていることにもよるのです。

こうした途上国の政府の政策、西欧の援助のあり方、貧困、低開発、植民地支配、戦争、人口増加、不公正、不平等、民主主義の欠如、環境問題、国際協力の失敗、などについて幅広く検討している。どの理論が正しいかを問うのではなく、問題を多面的に捉えることを提唱している。伝統的な食料欠乏説「FAD理論」（Food Availability Decline Theory）を排除し、飢饉分析に革命をもたらしたアマーティア・センの「エンタイトルメント・アプローチ」の解説には力を入れています。

松井範惇　教授　大学院東アジア研究科　社会動態講座
TEL:083-933-5530　E-mail:npmatsui@yamaguchi-u.ac.jp

「牡牛と信号―〈物語〉としてのネパール」

（春風社　2002年11月24日）

本書は、ネパールの日本大使館に専門調査員として勤務した2年間の経験と、そのときに行なったカトマンズ都市調査がもとになっています。都市調査は三菱財団研究助成金を得て行なわれた共同研究の一部ですが、本書は研究報告の形をとっていません。それは大使館員として、ネパール社会に突き刺さった外国人社会のあり様を観察し、その成果をも織り交ぜて書いているからです。

ネパールの外国人社会は、短期滞在を繰り返すフィールド調査からは決して窺い知ることのできないネパール社会の重要な一側面です。したがって、本書の特徴は、研究成果を自らの生活経験と絡ませながら、社会科学用語を使わずに、あえて〈物語〉としての〈語り〉を採用した点にあります。本書の後半部分で、現地の小説やエッセイを材料として積極的に使っているのも、社会科学の〈語り〉の可能性を試作した結果です。このような〈語り〉へのこだわりは、本書で紹介しているチベット人英語作家の「世の中にはフィクションでしか語れない現実というものがある」ということばに共鳴するからで、「ネパールのこんぐらかった現実」（谷川俊太郎評）はまさにそのようなものだと言えるでしょう。

なお、本書は第2405回日本図書館協会選定図書に選ばれました。

山本真弓　助教授　人文学部人文社会学科／佐々木幹郎序文

教官著作書の紹介

「数学の基礎体力をつけるためのろんりの練習帳」

（共立出版　2002年2月25日）

学生のセミナーではときどき奇妙な議論にお目にかかります。

学生：「『すべての犬は芸ができる』は間違いです。したがって、その否定『すべての犬は芸ができない』が正しいことになります。」

先生：「おまえ、そんなこと言うと、となりのポチにかみつかれるぞ。」

「すべての犬は芸ができない」なら正しくないということがすぐにわかりますが、「すべての（与えられた境界を持つ）体積最小なn次元超曲面は特異点をもたない」なんていうあまりなじみのない主張だと、ものすごい“大理論”を展開してくれたりします。

文章を論理的にあつかう力をつけるには、文章の構造を記号化して頭を整理することが近道だと思います。これは「記号論理学」という分野ですが、本書は記号論理学のかたくるしいテキストではなくて、「使うための論理」を念頭に、必要なことをていねいに書いた独習書です。イラストや“親しみやすい”演習問題も入れてあります。そういえば出版した直後、

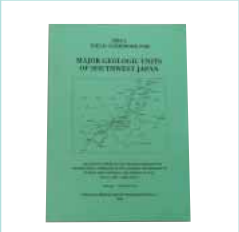
「本屋に変な本がおいてあったので、よく見ると先生の本でした。」

と、わざわざ私の部屋まで報告しに来てくれた学生のみなさん、よけいなお世話をありがとう。

中内伸光　助教授　理学部数理科学科
TEL:083-933-5661（FAX兼用）　E-mail:nakauchi@yamaguchi-u.ac.jp

「ISRGA Field Guidebook, Major Geologic Units of Southwest Japan」

（ゴンドワナ研究会　2001年10月）



本書は、2001年に大阪で開かれたISRGA（ゴンドワナ・ロディニアの集合分裂とアジア大陸の成長）というテーマの国際集会のField Workshop（現地見学会）のために、編集されたものです。ゴンドワナというのは、今から約6億年前（ロディニアは約10億年前）に形成されたと考えられる超大陸で、現在の大陸の分布や日本を含むアジア大陸もこうした超大陸の分裂移動の結果できたと考えられています。

この国際集会では、欧米はもとより特にアジア・アフリカからの参加者が多く、本問題への世界の地質学者の関心の高さが注目されます。本書は、国内の関連研究者10数名が、それぞれの得意分野を生かして、四万十帯・三波川帯・領家帯・飛騨帯・美濃帯など、西南日本の主要な地質帯の概要と典型的な地域・地点の地質を、現地で分かるように解説されたもので、日本の研究者や学生が現地見学する際にも有用と思われます。

加納　隆　教授　理学部化学・地球科学科・地球科学講座
TEL:083-933-5745　E-mail:kano@yamaguchi-u.ac.jp

「幼稚園で育つ　自由保育のおくりもの」

（ミネルヴァ書房　2002年3月10日）

この本には200人の幼児と10人の個性的な保育者が登場します。教育学部附属幼稚園での日々の生活が、飾ることなく、ごまかすことなく、つづられています。3歳から5歳までの子どもたちはどんなことを感じ、考え、生きているでしょうか？　その思いの強さ、豊かさ、真剣さ、けなげさは、私たち大人を生き返らせてくれます。その子どもたちの真剣な思いに、保育者たちがどんな風に寄り添い、支えるか、読んでみてください。きっと、幼児の世界とそれを支える保育という仕事の魅力と、その奥深さに気づくことでしょう。子どもたちは、幼稚園のことも先生の名前も忘れてしまいます。だけど、その時期に、その子の人間としての基本的傾向が見えてきます。それに寄り添いながら、大人として、伝え、育てたいものがあります。そんな思いを「自由保育のおくりもの」というサブタイトルに込めました。

友定啓子　教授　教育学部・教科教育撰修家政教育教室
TEL:083-933-5409　E-mail:tomosada@yamaguchi-u.ac.jp

新聞掲載された山大・地域から見た山大

10月

◆ TV番組も作ります　山口大CATVで毎日放映中
地域教育や行事の紹介　（朝日:1日）

◆ 申請5件不採用　ー山口大ー
文科省の研究補助事業　（山口:2日）

◆ 技術・経営リンクさせ教育
山口大大学院新コース開講　（日経:2日）

◆ ロボット作ろう
26日、山大公開講座　（山口・宇部:3日）

◆15日から公開講座　ー山口大経済学部ー
福祉事業などテーマに　（西日本:4日）

◆人・模・様　ー山口大留学センター講師門脇　薫さん
日本映画で日本語学ぶ本　（毎日:3日）

◆ 肝がんの再発予測法を開発　ー山口大グループー　（朝日:3日）

◆ 失業問題がテーマ　山口大公開講座
ー山口大学経済学部ー　（防長:5日）

◆ 若者の悩みや生き方　『等身大で演じたい』　山大と県立大の学生劇団 中盤にダンスも　あすから山大で公演
（朝日:10日、日西日本:11日）

◆ 市民フォーラム「スポーツ用品と材料力学」　（朝日:10日）

◆ 緑内障に対する正しい認識を
ー山口大学医学部附属病院眼科　講師相良　健氏
（朝日:10日）

◆ 産学官で地域活性化　研究の組織化が課題
ー山口大・加藤　紘学長　（中国:11日）

◆ コウモリの声　親子で聞こう
ー山口大学理学部助教授の松村　澄子さん　（中国:12日）

◆ 体育の日にイベント　山大工学部で　（西日本:12日）

◆ 医療機器開発展望など講演
あす山大工学部で　（山口・防長:17日）

◆ 山口さーくる広場　ー山口大学・山口県立大学ダンスサークルー
音楽に合わせて自分を表現　（サンデー山口:17日）

◆ 山口大人文学部公開講演ールネッサながとー（朝日:17日）

◆ 市民オープンフォーラム
「最近の大水害の実態と防災・減災対策のあり方を考える」に参加して　山大工学部社会建設工学科教授　山本哲朗氏　（宇部時報:17日）

◆ 宇部のベッコウトンボ保護へ　山口大教授ら6委員
県、道路建設影響を調査　（中国:18日）

◆ 解剖献体者宇部で慰霊祭　ー山大医学部ー
（山口:19日）

◆ 山大経済学部が30日に学術講演会
（宇部時報:19日、山口・:21日）

◆ 「知と地域の架け橋を」山大教授らが学会設立
（朝日:23日、中国・日経・山口:26日）

◆ 山大公開講座　失業問題を検討
（サンデー山口:23日、山口:25日）

◆ メディカルクリエイティブセンター
医工連携の拠点が着工　新産業の創出・育成を
（宇部:22日）

◆ 山口大学長、気軽に対話　「コーヒーアワー」始まる
学内の生の声聞く　（中国:25日）

◆ 日本縦断中の坂本達さん山大で公開講演会
（サンデー山口:25日）

◆ 産学公技術交流フェア　11月15日、山大工学部
講演や特許・研究紹介など　（宇部:24日）

◆ ロボット作りに挑戦　（朝日:27日）

◆ 第53回　山口大学大学祭　11月3日
姫　山　祭　山口大学構内にて（サンデー山口:30日、11月1日）

◆ 第61回西日本文化賞　地域の伝統に知の光
最先端の角膜治療　山口大教授　西田　輝夫さん
（西日本:31日、中国:11月3日・西日本:11月4日、7日）

◆ 最新の漢方医療　山口大学医学部　宮本泰嗣教授に聞く
（読売:31日）

11月

◆ 「HIV正しい理解を」ビデオ上映や講演会
山大医学祭で9、10日　（朝日:1日）

◆ 「科学や技術の楽しさ知って」3日、山口大で講演会（朝日:1日）

◆ 山大埋蔵文化財資料館　公開授業の参加者募集
（サンデー山口:2日）

◆ 銅賞の山口大躍動感いっぱい　ー吹奏楽コンクール　（朝日:3日）

◆西日本文化賞を贈呈　4氏3団体
山口大学理学部教授　西村祐二郎氏（中国:3日、西日本:4日）

◆ 秘蔵の資料を公開　ー山大図書館ー
オープンライブラリー　（朝日:4日）

◆ 市民会館で発表大会　ー山口大学吟詠部ー（サンデー山口:6日）

◆ 山口大ゼミナール大会　ー山口市のキャンパスー
（宇部時報:7日）

◆ 山大医学祭特殊講義
「ジャズピアニストが語る」8日、全日空ホテル（宇部時報:6日）

◆ ナチス収容所の子供たちの詩、テーマに　平和への願いを朗読
「テレジン」9日山口公演　山大の学生が出演（朝日:7日）

◆ 山大理学部「訪問サイエンスワールド」
市内の小学校・公民館で開催　（サンデー山口:8日）

◆ サンデーひと舞台　パラボラ大改造宇宙の謎に挑む
山口大理学部助教授藤沢健太さん　（読売:10日）

◆ 委員らに辞令交付　ー県男女共同参画審ー
（防長:10日）

新聞掲載された山大・地域から見た山大

◆ 東アジア国際会議開催　ー山口大大学院と経済学部ー
15、16日ジェンダーなどテーマ
（読売:13日・朝日:14日、山口:15日）
（宇部時報:28日）

◆「広中平祐基金」仏研究所が創設
日本の研究者増員狙い　（日経:14日）

◆ めざせ交流立県　第4部　光がつなぐ
島の医療　100キロ隔て最先端の診断
山口大拠点病院ネット　（中国:19日）

◆ 山大経済学部外交講座
WTO新ラウンドの現状と展望　（サンデー山口:20日）

◆ 医療教育等で功労山大病院2人表彰　（山口:21日）

◆ 山大教育学部　あす、授業を一般公開
（サンデー山口:21日、読売:22日、山口:26日）

◆ 大津波から村民を救った濱口梧陵の偉業
和歌山県広川町広の津浪祭に参加して
山大工学部社会建設工学科教授　山本　哲朗氏
（宇部時報:21日、ウベニチ:30日）

◆ 12月6、7日に中国地区高専地域振興サミット
産学官連携の講演会や事例発表　（宇部:20日）

◆ 地域との元気な関係が大切
宇部市環境審議会の新会長に就任　小嶋　直哉さん
（宇部:21日）

◆高大連携テーマに山口セミナー　30日山口
ー山口大アドミッションセンター高大連携セミナー係ー
（中国:27日）

◆ 県科学技術振興奨励賞
山大・宮本教授が受賞　学際分野の研究評価
（毎日:26日、山口:27日）

◆ 山大美術部「パンのみみ展」
あすから、市民会館で　（サンデー山口:27日、中国:30日）

◆ 山大時間学研究所学術講演会
7日、山口市の県立図書館
（宇部時報:28日サンデー山口:12月5日）

◆ 工学部に中国経産局から初の出向
大学と中小企業のパイプ役に期待　宮地　寿さん
（宇部時報:28日）

◆ 山口大学文化会演劇部公演　（朝日:29日）

◆ 山口大学マンドリンクラブ
12月14日に定期演奏会　（サンデー山口:30日）

12月

◆ 子育てのあり方考える
山大で講演、シンポ　（毎日・読売・山口:1日）

◆ 地域通貨で竹林伐採
学生NPO参加者に「350シティ」払う　（読売:2日）

◆ 留学生が陶芸に挑戦　萩焼の特徴や歴史学ぶ
（宇部時報:2日）

◆ 山口大　『遠隔講義』へシステム発進　県立大
高速ネット3ヵ所結ぶ　双方向通信で質問や討論　単位互換もOK
（朝日・読売・毎日・中国・山口・防長:3日、サンデー山口:5日）

◆ 県科学技術振興奨励賞
橋など維持管理システム開発　宮本・山大教授が受賞
（西日本・朝日・防長:4日）

◆ 米への小中高教員派遣事業　ー山口大ー
8日現地研修報告　（山口:5日）

◆ よその学生と交流『ネット』立ち上げへ　ー山大生ら20人ー
「新たな可能性生まれるはず」　2月に設立イベント
（朝日:6日）

◆「ピアヘルピング講座」受講者を募集
（サンデー山口:6日）

◆ ー山口さーくる広場ー　演奏依頼を待ってます
山口大学文化会吹奏楽部　（サンデー山口:5日）

◆ 中学校で初の出前講義　桃山の3年生26人科学の面白さ
体感　山口大工学部大島講師と極低温実験
（宇部時報・防長:5日）

◆ 山大、県立大生が15日にダンス公演　（サンデー山口:8日）

◆ IT活用し研究支援　ー山口大で記念式典ー
メディア基盤センター設置　（読売・山口:7日）

◆ 今年度中、山大病院に女性診療外来を開設へ
（宇部時報:6日）

◆ ー過去の南海地震の履歴・特徴・被害を教訓にして防災
この30年内に起きる確率の高い南海地震
山口大工学部社会建設工学科教授山本哲朗氏
（宇部時報:11日）

◆ 上り調子山口大A　ー一般1部ー　（中国:11日）

◆ 学生耕作隊　人手不足の農家で有償ボランティア
全国ネットづくり目指す　山口大の女子学生のアイデアから
（毎日:12日）

◆ 教育学部存続へ街頭で署名活動　ー山大の教授・学生らー
（朝日・読売・山口・西日本:15日、山口・読売・朝日:17日）

◆ 30分500円で語学家庭教師　ー山口大の留学生ー
地域住民と交流拡大　（日経:15日、毎日:17日）

◆ 法人法案に向け長期目標案協議　ー山大運営諮問会議ー
（山口・毎日:18日）

◆ 教育学部長に熊谷氏を再選　ー山口大ー
（朝日;19日、山口:20日）

◆がん診断に強い味方
IDNAチップ佐々木教授（山口大）らが新製品開発
（宇部:20日）

◆ 学生支援センター開設へ　ー山口大ー
来年度政府予算で認められる
（読売・朝日・山口:23日、中国:25日）

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

ア．Q＆A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職(学生の場合は学年)、年齢を付して文書でお願いします。Q＆A欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ．催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ．「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

１．原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第１行は題名、２行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は４行目から始めてください。本文は３～４に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思いますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙４枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。　ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えな
ければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行　題名 第2行　氏名、所属部局名、研究室名、職 第3行　（空白） 第4行　本文始まり ・ ・ 第40行　本文終わり （TEL ＿＿＿＿＿＿ ）

２．ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753-8511
山口市吉田1677-1
山口大学総務部総務課（総務課広報室）
広報・調査係長　有吉義和
☎083-933-5007　FAX083-933-5013
E-mail:SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

今や情報化社会。パソコン、インターネット、テレビなど印刷、通信、放送技術の飛躍的な発達によって「情報」が高い価値を持つ時代になりました。広報の社会的重要性は高まるばかりです。学術・教育推進の先端に立つ大学にとっても同様です。「山口大学広報誌」は学内の教育・研究活動の取り組みや成果を地域社会に届け、また、地域社会のリクエストをいかにして大学に反映させるかの橋渡しをしています。開かれた大学の情報発信源です。

このところ国立大学法人化に向けて、「２１世紀の大学はどうあるべきか？」が問われています。本号は”新世紀に躍進する山口大学”をテーマに、山口大学の教育・研究の活動状況の実情と課題を取り上げました。産学公連携を重視する国立大学法人化に向けての中期目標・中期計画をはじめ、地域社会との交流などについて新たな視点と分析で紹介しています。これらのレポートを通して、山口大学への理解を深めていただきたいと思います。山口大学は、常に切磋琢磨して「よい大学」、「誇れる大学」を目指します。

高橋　睦夫

◎山口大学ホームページhttp://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_ j.html

山口大学広報第六十四号
平成十五年一月二十一日発行
編集発行　山口大学広報委員会
（総務部 総務課 広報室）
住　所：山口市大字吉田一六七七ー一
電　話：（０８３）９３３ー５００７
ＦＡＸ：（０８３）９３３ー５０１３
E-mail：SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp
印　刷：有限会社 三共印刷

広報活動専門委員会委員
小谷　典子（委員長　人文学部）
坪郷　英彦（人文学部）
福田　隆眞（教育学部）
マルク・レール（経済学部）
小宮　克弘（理学部）
高橋　睦夫（医学部）
森田　昌行（工学部）
宇佐見　晃一（農学部）
野島　真治（医学部附属病院）
専門委員
堀江　穆（アドミッションセンター）
熊谷　武洋（教育学部）
木下　武志（工学部）
小林　邦和（工学部）